

ふるさとを 想う まもる つなぐ

地域の大学と町役場の試み

シンポジウム

なぜ地域資料を保全するのか



ふるさとを 想う まもる つなぐ ～地域の大学と町役場の試み～

富岡町・福島大学・福島大学うつくしまふくしま未来支援センター



ふるさとを
想う まもる つなぐ

～地域の大学と町役場の試み～

富岡町・福島大学・福島大学うつくしまふくしま未来支援センター

富岡町・福島大学・福島大学うつくしまふくしま未来支援センター

ふるさとを

地域の大学と町役場の試み

想う

シンポジウム

まもる

なぜ地域資料を保全するのか

つなぐ

■シンポジウム なぜ地域資料を保全するのか

①開催趣旨

柳沼 賢治（福島大学つくしまふくしま未来支援センター）……………3

②基調講演（十三時五分～十三時四十五分）

徳竹 剛（福島大学行政政策学類准教授）……………「富岡の地域資料保全活動が語るもの」……………5

③報告（十三時四十五分～十五時）

三瓶 秀文（富岡町教育委员会主任学芸員）……………「富岡町の歴史資料保全活動と今回の企画展の内容」19

佐藤 新（福島大学行政政策学類四年生）……………「歴史資料の保全活動に参加して」……………27

菅家 美和子（歴史資料保全活動参加ボランティア）……………「富岡町の歴史資料に接して」……………33

吉岡 崇（埼玉県杉戸町役場・他自治体復興支援職員・元富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチームメンバー）……………「内と外からみた歴史・文化等保存プロジェクト」……………39

大原 弘道（富岡町民資料寄託者・中央商店街）……………「地域の歴史資料の保全活動に期待すること」……………45

④パネルディスカッション（十五時十五分～十六時十五分）……………49

コーディネーター

阿部 浩一（福島大学行政政策学類教授・富岡町文化財保護審議会会長）

パネリスト

徳竹 剛・三瓶 秀文・門馬 健・佐藤 新・菅家 美和子・吉岡 崇・大原 弘道

■企画展 富岡町と福島大学との歴史・文化等保全活動に関する協定書締結1周年記念事業

ふるさとを 想う まもる つなぐ 地域と大学と町役場の試み

門馬 健（富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム 学芸員）……………82

■対談 阿部 浩一・齊藤 紀明（富岡町副町長・富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム主任）……………97

あとがき 小松 賢司（福島大学人間発達文化学類准教授）……………115

まえがき

二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災、そして、原子力発電所事故から間もなく六年が経過しようとしている。富岡町では、二〇一七年四月の帰還開始を目指し、除染やインフラ復旧はもとより復興拠点の整備を始めとする復興・再生事業が盛んに行われている。

一方、複合災害からの復興は長い時間を要する。町民がどのような選択をしようとも、ふるさと富岡町に誇りを持ち続け、古里や人々との繋がりを感じられる「心の復興」を実現しなければならぬ。

富岡町は、二〇一四年六月に「富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム」を組織し、職員が各課を横断して地域資料の保全に取り組んできた。保全収集に当たっては、二〇一五年八月に「歴史・文化等保全活動に関する協定」を締結した福島大学の協力を得ながら進め、その数はおよそ一六、〇〇〇点を数える。

また、今回のような企画展を始めとする発信事業を通じて、実際に地域資料をたくさんの方々に見ていただき、地域の成り立ちや身近な人々の生活を振り返ることのできる機会の提供に努めてきた。さらに、こうした企画展等を一過性のものとはせず、より多

くの方々が地域資料を保全する意義や必要性を考えるきっかけとなればという想いから、今回の企画展・シンポジウムの内容がまとめられ、本書が刊行された。

本書が、より広く多くの人々の手に渡り、地域資料の保全の意義を広めるものとなることができれば幸いである。

最後に、本書の刊行に当たり御尽力いただいた関係各位に心より御礼を申し上げます。

富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム 主任

富岡町 副町長 齊藤 紀明

平成二十七年八月二十七日、富岡町の地域資料を後世に継承することを目的として、「富岡町と福島大学との歴史・文化等保全活動に関する協定書」が締結されました。これに基づき富岡町と福島大学は、富岡町域の地域資料の所在調査、資料の保全及び整理作業、調査研究及び発信等の活動について相互に協力し合ってきました。

協定締結から一年という節目に当たり、企画展では、これまでの活動を振り返るとともに、協定をもとに整理した資料から読み取れる地域像について紹介しています。また、このシンポジウムでは、地域の歴史資料を保全する意義と、今後の期待できる可能性について探りたいと思います。

初めに福島大学行政政策学類准教授の徳竹剛先生に基調講演をお願いしますが、先生は、富岡町の地域資料の保全に初期の段階から携わっており、保全活動だけでなく、資料の内容にも詳しいことから、保全活動とその意義に関する講演をいただきます。また、パネルディスカッションでは、富岡町の文化財保護審議会長も務めています福島大学行政政策学類教授の阿部浩一先生にお願いしております。パネラーには、活動の中心的メンバーであります、富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチームの三瓶秀文さん、門馬健さん、保全活動に参加している福島大学四年の佐藤新さん、ボランティアとして

保全活動に参加されている菅家美和子さん、復興支援で富岡町に派遣され、保全活動に参加されていた埼玉県杉戸町の吉岡崇さん、そして、資料を寄託されている大原弘道さんです。

パネラーの顔ぶれを見てお分かりいただけると思いますが、このシンポジウムの人選は、町民の方々が生きてきた証とも言える地域の歴史資料の保全活動と今後について、専門家だけでなく、内と外が多様な立場の方々に発言していただき、一緒に考えることを意図したものです。地域や一般の方々の理解がなければ、歴史資料は、十分な保全ができないだけでなく次世代につなぐこともできないからです。

以上の趣旨をお含み頂き、シンポジウムにご参加いただきたいと存じます。

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任准教授

柳沼賢治

徳竹 剛

(福島大学行政政策学類准教授)

「富岡の地域資料保全活動が語るもの」

福島大学の徳竹と申します。どうぞよろしくお願いします。

本日は、私がどのようなことを考えて富岡の地域資料の保全活動に取り組んでいるのか、またこの富岡の活動にどのような意義があるのか、といったことについてお話ししたいと思います。

協定締結に至る経緯

冒頭で紹介がありましたように、富岡町と福島大学との間で協定が締結されて一年になりました。まずそれに至る経緯について簡単にご説明した上で、本題に入っていきたいと思います。

富岡町で「富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム」というものが発足しましたのは二〇一四年になり

ます。このプロジェクトチームが発足し、活動を始めるにあたって、私のところに相談といいますが、協力してほしいという依頼がありまして、それで関わるようになりました。

一方、福島大学の方でも、地域と連携した教育・研究活動を重視しておりまして、文科省で募集していた地(知)の拠点整備事業(COC事業)に「ふくしま未来学」というものを申請し、採択されました。そのため、その「ふくしま未来学」の事業の中に富岡の活動への支援を位置づけることで、大学としてもこの活動を支援していこうということになりました。二〇一四年・一五年は「ふくしま未来学」の枠組みの中で活動してきました。また、実際に活動するにあたっては、参加者募集や物品の利用等でふくしま歴史資料保存ネットワークからも支援を受けて活動しております。

活動が始まった二〇一四年には二回、一五年には四回、また今年度もすでに一回、福島大学の学生と教員、富岡町の職員の方々、さらに今年度は一般のボランティアの方も加わって、資料整理作業を実施しました。それによって、現在までに一万二、〇〇〇点の資料をリスト化することができました。

活動の中身は、スライドにもありますように、資料の写真を撮るとい作業と、その資料の概要を把握して名前をつけていく、つまり目録を作るとい作業になります。また作業後には、資料の写真を整理するとともに目録をパソコンに入力してデータ化していきます。

こうした活動が始まって一年少々過ぎたところで、富岡町と福島大学との間で協定を結ぼうということになりました。もちろん、これは今まで活動してきたことが一定の成果を上げているということもありましたし、今後もそれが長く続けられていくような体制をつくるということで、協定を結んだわけです。

このような形で、福島大学の教員、それから本学の歴史系ゼミに所属している学生がこの事業に関わっていくことになったわけですが、この活動にどのような意味があるのかということについて、歴史学の面から考えてみたいと思います。歴史学界と地域の関係については、塚本学が一九七六（昭和五十一）年に「地域史研究の課題」（『岩波講座日本歴史』二十五別巻二、岩波書店、一九七六年）という論文を書いておられますので、以下、それを参考にしながらお話しいたします。

戦前の日本の歴史学界においては、地域の歴史というものが取り上げられるということはほとんどありませんでした。もちろん、当時も郷土史家と呼ばれる方は多数おり、地域の歴史について関心を持って調べておられる方はいたのですが、それとアカデミズムは一線を画していたというのが戦前日本の地域の歴史をめぐる状況です。

一例として、民俗学を始めた柳田國男の文章を引いておきたいと思いますが、柳田は一九一四（大正三）年に、「何れの国でも年代記は素より事変だけの記録です。此へ貴人と英傑の列伝を組合わせたやうなものが言はば昔の歴史ではありませんか」と述べています。そしてそのようなものから国民の心持ちを推定するなど無理であるといえます。また江戸時代の名所図会などでは、小さな丸の中に目と口を描いて見物と名づけ、その後ろに丸薬のような丸印を並べて群衆というような、そういう扱いを受けているのが民衆である、歴史学の世界においても同様に民衆は極めて軽んじられているということを指摘しています（柳田國男「郷土誌編纂者の用意」『郷土研究』二一七、一九一四年、『定本柳田國男集』二十五、筑摩書房、一九六四年所収）。

柳田は、貴人や英傑の歴史ではなくて、それこそ日本の国民がどのような歴史を歩んできたのか、どのような生活してきたのかということに興味を持って研究を続けていくわけですが、このような批判が生まれるような状況というのが、戦前の日本の歴史学界のあり方だったわけです。

このようなあり方が反省されて、「日本の歴史」といったときに、我々自身の歴史、つまり民衆の歴史であるとか国民の歴史といったものを重視すべきではないかというように考えられるようになりました。戦後に発足した地方史研究協議会が一九五二（昭和二十七）年に『地方史研究必携』という本を発行していますが、その中には以下のような文章があります。

「日本武尊、行基、坂上田村麻呂……、こうした人々との関係を語るような話でもなければ、自分たちの郷土には大して歴史がないなどと言ったものである。そんな愚なことはない。歴史は人間の生活していたところ、すべてにわたって展開したはずである」（『地方史研究協議会編『地方史研究必携』岩波書店、一九五二年）。

戦後に歴史学が再出発するにあたり、当時の研究者はこのような意気込みを持って歩み始めました。その後、戦後歴史学においてたくさん研究成果が生まれました。特に地方に事例を求める研究というものが非常に盛んに行われるようになっていきます。

事例をいくつか挙げると、百姓一揆の研究は非常に多く行われましたし、村方騒動などを取り上げる研究もたくさん出ました。また、近代史の分野では自由民権運動に関わる研究成果が数多く生まれました。それこそ地元に埋もれていた民権家たちを掘り起こして彼らを顕彰するような、そういう研究がたくさん生まれ、積み

重ねられていったわけです。また、地主―小作制の問題であるとか、おそらく学校で学んだ記憶があると思いますが、問屋制家内工業から工場制手工業へとか、そういった生産や流通に関わること、社会経済史の分野の研究が非常に盛んに行われていくことになります。地方のこうした個別の事例を研究し、その中から時代の一般性を見いだしていく研究、これが戦後歴史学において行われてきた日本史の研究でありまして、これに基づいてかなり多くの成果が生まれました。

しかし、このような研究成果が積み上げられていく中で、一九七〇年代に入ると、そのことによって一般市民の歴史意識は変わったのかという点があらためて問われるようになっていきます。一例として木村礎の言葉を引いておきたいと思います。木村は一九七〇年に発表した『近世郷土史研究法』という本の中で、「戦後の地方史研究の」一般性志向的性格のために……普通の人々が内奥に持つ深い歴史意識に答ええず、当然それを動かし得なかった……戦後の地方史研究は普通の人々がたまさに表出する歴史への具体的問いかけに対しては、戦前の郷土史研究や民俗学ほどにも答えられなかったのではないか」（木村礎『郷土史研究講座四 近世郷土史研究法』朝倉書店、一九七〇年）といっています。

先ほども述べましたとおり、戦後歴史学においては、地方に事例を求める研究が非常に多くなり、その中から日本史に通用するような一般的法則というものを取り出すことで研究が進んでいきました。結果として、その地域のある一面、自由民権運動なら自由民権運動だけではよくわかつたけれども、その周辺の事情についてはよくわからないとか、地主―小作関係は明らかになつたけれども、そのほかの部分、その地域全体について分かつたかといえば必ずしもそうではない、というようなことが生じることとなりました。戦前の郷土史家の方

が、よほど地域住民が持っている素朴な興味関心にこたえられたのではないか、研究者は、日本史の学界において必要な部分だけをつまみ食いするような、そういうことをしてこなかつたかということが一九七〇年頃に疑問視されるようになり、そうではないけないと考えられるようになっていきます。

このような指摘は研究者の間でも一定の理解が得られたと思います。しかしその後、一般市民の歴史意識を変えていくことができたかといえば、なかなかそのようにはなりませんでした。

なぜそのように考えられるかというと、それは大災害が発生したときに明らかになりました。一九九五（平成七）年に阪神・淡路大震災が発生しましたが、震災直後に歴史研究者の間では、被災地の歴史資料が散逸してしまうのではないかと、捨てられてしまうのではないかとという危機感が生まれました。そのため、神戸を中心にして歴史資料ネットワーク（史料ネット）という団体が立ち上げられ、地域の歴史資料の救出活動が行われました。また二〇〇三（平成十五）年には宮城県北部地震が発生しました。その際にも、仙台の歴史研究者を中心にして宮城歴史資料保全ネットワーク（宮城資料ネット）が立ち上げられることになりました。

私も宮城県ですと勉強しておりましたので、その宮城資料ネットの一員として、二〇〇三年の頃から地域資料の保全に関わってきました。被災地に入って行って、歴史資料を持っていそうなお宅、長い歴史を持っている旧家などを中心に訪問するわけですが、そうしたお宅で歴史資料についてお伺いすると、災害後の片付けの中で捨ててしまったと言われることもありました。もう少し早ければとがっかりすることになり、大きな災害が発生する前から歴史資料の所在を確認して置くことの重要性を認識させられることになりました

（平川新「災害」「後」の資料保全から災害「前」の防災対策へ」『歴史評論』六六六、二〇〇五年）。

また、お伺いするなかでは、震災以前に、何年も前に捨ててしまったということを聞くこともありました。あるいは、地域の歴史が分かるようなものはお持ちではないですかとお尋ねすると、うちにはそんな大したものはないよとおっしゃる。ただ、こちらが歴史資料とはこういうものですよという話をしていくと、そういうものだったらあるとおっしゃって、江戸時代の古文書がずらつと出てくるとか、そういったことがありました。

つまり、自分の家にあるものが歴史資料にあたる、歴史資料として貴重なものであるというような認識を持っておられない方というのがたくさんいるということです。それはやはり、それこそ日本武尊や行基や坂上田村麻呂に関わるようなことでなければ歴史ではないというような歴史意識が根強くあり、そこを変えるには至っていない、その反映であろうと思います。

何が歴史資料になるのかとか、もうちょっといえば歴史とは何かという問題ですね。このような、人々の歴史意識というものが変わっていないと史料は残らないのだということです。同じような経験は阪神・淡路大震災の際にもありました。歴史資料保全活動に関わったことのある方々は、このような経験について色々なところで発言をされておりますので、歴史学界のなかでは共有されているのではないかと思っておりますが、歴史資料を残すには、ここが大切だということです。

その後、二〇一一（平成二十三）に東日本大震災が起こります。このときにはさまざまな団体が地域の歴史や文化の救出に携わり、文化財レスキューというのが一般的にもよく知られるようになりました。そのことは非常にいいことだと思います。文化財レスキューというものが存在するということがこれだけよく知られるよ

うになったのは、やはり東日本大震災の結果です。ここ数年は、大災害が起れば文化財レスキューが始まるのだというような、そういう感覚がかなり共有されているのではないかと思います。

ただし、東日本大震災の場合は、津波の被害というものが非常に大きくて、結果として震災の後の文化財レスキューというのは、震災の被害を直接受けて壊れてしまった文化財を直すとか、津波をかぶった文化財を救うとか、そういうイメージが流布したという点があると思います。それはもちろん大切な仕事ですし、やらなければいけないことなものですけれども、以前から問題として意識されてきたような、人々の歴史意識を変えるというような点については、なお課題として残っていると思います。東日本大震災は、文化財レスキューにとって大きな画期になったことは間違いないと思いますが、結果として、忘れられた問題意識というものがあるのではないかと私は考えています。

地域住民と歴史

そうした中でも、注目すべき動きがあります。それは、浪江町の赤宇木というところの事例です。これは、私が偶然テレビを見ていて知った話で、NHKドキュメンタリー「赤宇木」（二〇一五年九月東北Z、二〇一六年三月BSプレミアムで放送）という番組として放送されました。

二〇一一年の原発事故のあと、連日、各地の放射線量が新聞などで報じられるようになりました。その中で、とりわけ高い値を示していたのが浪江町の赤宇木という地区です。赤宇木の名は、そのようにして全国に名が知られていくことになります。

番組によると、環境省の方が赤宇木に来た際に、この地域には百年は帰れないというようなことを言ったそうです。その言葉を聞いた住民が、百年は帰れないとしても、百年後、再びこの地に住む人々がいるとして、その人たちにこの地域にどのような歴史が積み重ねられてきたのかを伝えたい、私たちとその先祖が生きてきた歴史を伝えたいと考えて、地域の歴史の掘り起こしに取り組んでいるという番組でした。原発事故後、全国に散らばっている赤宇木出身の人のところに訪ねていつて、どのように暮らしていたのか、農業や林業はどのようなであったのかという話の聞き取りを重ね、かつてこの地で行われていた鉄の精錬の痕跡を探して山を分け入り、この地で使われていた方言を集めて一覧表を作成しと、極めて精力的に、この地の文化や歴史、住民の経験を残そうと努力されてきました。地域の方々が、その地を離れなければならない事態になったときに、その地域のことを記録に残しておきたいと考えて実際に動き始める。震災と、それから、原発事故というものを契機にして、そうした動きが生まれているという番組でした。

これと似たようなことといえますか、私自身がやったことの中にもこれと近いものがありますので、それについても紹介しておきたいと思います。調査したのは二〇〇八（平成二十）年ですから、東日本大震災が起る前のことですけれども、長野市に台ヶ窪という集落がありまして、そこで調査をしました。なぜ震災前の、しかも長野の話を紹介するのかわかと思いますが、私の父が生まれた集落というのが台ヶ窪でして、要するにこれは私のルーツということになります。現在でも私の伯父夫婦が住んでおりまして、その縁で関わることとなりました。

ここには、二〇一〇年一月時点で戸数十四戸、三十五人の方が住んでいました。それ以前と比べると、非常に住人が少なくなってしまった集落です。山の中にあつて、地域の高齢化が進んでいますので、いずれこの地域に人が住むことはなくなってしまうのではないかとというような、そういったことが心配されるような集落です。

この集落では、高齢化が進んでいく中で、かつては機能していた青年会の活動も停止してしまい、集落のお祭りなどを維持することも難しくなっていました。一九九〇（平成二）年前後だと思えますけれども、台ヶ窪の人たちは、一度途絶えてしまった獅子舞を復活させようと動き出します。しかも、集落のなかで披露するだけではなくて、地元のデパートでも披露しようと、そういった活動を始めて、地域の活気を取り戻そうとします。

それだけにとどまらず、青年会が歩んできた歴史をたどり、それを記録に残すという活動にも着手します。スライドでお見せしているのは、その青年会のかなり初期の頃の写真です。戦前のもので、消防団の半被を着ての集合写真です。また、これは戦後の写真ですが、集落で消防訓練をしているときの写真であるとか、そういったものが載っています。

そうした取り組みは、地域全体の歴史へも波及していくことになりまして、台ヶ窪の歩みをまとめた冊子を作り始めます。青年会の記録を取りまとめるだけではなく、台ヶ窪の昔や今の姿を撮った写真を集め、また台ヶ窪の集落に住んでいる方、あるいは住んでいた方に集落の思い出を書いてもらって、それらを一冊の本にまとめました。また、台ヶ窪にも郷土の歴史に関心を持っている方がいらつしゃって、一九七九（昭和五十四）年に「台ヶ窪の歴史」という手書きの冊子をつくっています。その写真版もその冊子、『台ヶ窪地区記録誌』（台ヶ

窪同志会編集委員会、二〇一〇年」といいますけれども、その冊子の中に収録されています。

その過程で、大学院で歴史の勉強をしていた私に声が掛かり、台ヶ窪で持っている古文書について調査することになりました。古文書の目録を作り、その古文書から分かる江戸時代の台ヶ窪集落の姿について書きまして、それも『台ヶ窪地区記録誌』に載せていただくことになりました。

赤宇木も台ヶ窪も、住民自身が何らかのきっかけによって郷土の歴史というものに関心を持ち、そして、行動に移していきました。そのきっかけというのは、赤宇木の場合は原発事故です。津波の被害を受けたところでは集団移転ということもありますが、大災害が起こって、その地域に住めなくなるといったようなことが起こると、自分の地域の歴史に対する関心が湧き上がってくるわけです。

そのきっかけが災害だけにとどまらないことは、台ヶ窪の事例からも明らかです。これから日本が足を踏み入れることになる人口減少社会においては、その地域に人が住まなくなるといふ事態は全国的に見られるものとなります。自分が生まれ育った郷土に誰もいなくなるような事態が発生する中で、自分の地域の歴史に対する関心が呼び起こされていくことになります。つまり、自らが残すべき「私たちの歴史」に目が向いていくことになるだろうと思います。今回は、二つの活動を紹介しましたがけれども、これらの活動が発するのは「私たちの歴史」の大切さということになります。

おわりに

東日本大震災よりも前、宮城で資料保全活動に取り組んでいたときは、例えば土蔵がひとつあって、その土蔵が今週中に取り壊されると決まっている場合、現場ではあまり取捨選択はせずに、中に入っているもの全てを取り出して残そうとしてきました。取捨選択を始めると時間が掛かりますので、現場ではあまりそうした判断はしません。とは言いつつも、それでも多少は選別をします。多くの場合、土蔵は現役の倉庫ですので、その中には古いものも新しいものも、いろいろ入っています。そのため、いくら今週中に処分するといっても、さわめて現代に近いものであるとか、世の中にたくさんあるものとか、そういったものは取り出さないことがあります。

今年の八月に役場の方と一緒に富岡に入らせていただいて、ひとつの個人宅から地域資料を取り出す作業に参加してきました。東日本大震災まで暮らしていたお宅ですから、それこそ三月十一日のその日までのものが詰まっていました。私は、そのお宅に入って、富岡の歩み、地域の姿を後世に伝えるものは何かということを考えながら作業にあたりました。その中で、そのお宅で撮ったスナップ写真やアルバムが出てきました。私は、とても個人的なものであったし、年代的にもそれほど古いもののようにには思われなかったもので、これは持ち出さなくてもいいかなと考えましたが、それでもと思つて一緒に入った役場の方にお伺いを立ててみたわけです。そうしたところ、個人的な写真であっても、その中には震災以前の富岡の暮らしがあり、その様子が分かるので持っていきます、と言われました。

その言葉を聞いた時東日本大震災以前、ひとつの土蔵を壊すときに、取り出すか否か、歴史資料かどうかを判断するときには、その地域でまだ人が住み続けるということが前提になっていたということに気付かされました。その地域に住み続けることが前提になっているから、現代的なもの、よく見るもの、歴史的な価値はま

だないというようなものは置いてくるというようなことができたのですけれども、富岡のような、歴史がそこで途切れてしまったような地域は、そういう選別ができないということを突きつけられたような気がしました。つまり、二〇一一年三月十一日の時点でばつさりと切られてしまうわけですから、そこまでの、二〇一一年三月十一日までのものがすべて歴史化してしまうというような、そういったことが起こっているのだということをあらためて感じました。

長期にわたって住めなくなってしまう地域であるとか、あるいは過疎化によってその集落に人が住まなくなるだろうと思われる地域、そういったところが発するものというのは、いつもの日常生活がかけがえのないものであつて、その積み重ねが歴史であるということです。このような地域での、地域の歴史を残そうという活動は、そういったことを非常に強く発信してくれるのではないか。そして、我々はそういうメッセージを受け取らなければいけないのではないかとように思います。

最後に、今回の展示のタイトルが、「富岡の歴史を想い、まもり、つなぐこと」ということですので、それに引きつけて考えますと、富岡の歴史を想い、まもり、つなぐことの意義、それ自体は、富岡で生まれ育った人にとっては、これはもう自明のことだと思えます。あらためて言うまでもないかもしれませんが、自分や先祖が歩んできた道を知り、それを後世に伝えることができるということが、富岡の歴史を想い、まもり、つなぐことの意義になります。

しかし、それだけにはとどまらないだろうと私は思います。そのような富岡の活動を見聞きする人たちにとっては、その活動や富岡の地域資料が語る「私たちの歴史」の大切さというものを知ることにつながるだろうと

思います。ですから私は、富岡の人たちのためだけになるものではなくて、我々自身の歴史意識を変えていくような、そういう可能性がある活動だと思つてこの活動に取り組んでいるのです。

私の話は以上になります。ご清聴ありがとうございました。

「富岡町の歴史資料保全活動と

今回の企画展の内容」

富岡町教育委员会主任学芸員 **三瓶 秀文**

富岡町教育委員会、三瓶秀文と申します。よろしく願います。

私の報告は、地域資料保全に関する震災後の富岡町の取り組み、富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチームを起ち上げた経緯と活動の内容、そして福島大学の皆さんとの資料整理活動についてお話しします。合わせて今回の企画展の概要を紹介させていただきます。よろしく願います。

昨年八月の協定をもとに、資料整理のほうが二カ月に一回から三カ月に一回のペースで、阿部先生、徳竹先生、小松先生をはじめ、菊地先生にも越しいただいて、郡山のほうで富岡町内の地域資料の合同整理作業の様子がスクリーンに映っております。毎回、作業終了後に阿部先生のコーディネートで必ず参加者全員で集合写真を撮って解散するというような活動をこれまで七回行っております。

少し話が前後してしまいますが、震災から約一年後、福島県被災文化財等救援本部が起ち上がり、富岡町が管理・所有していた歴史資料については、警戒区域の外に搬出するという取り組みが始まって、そこから二カ年かけて、町内の収蔵庫に入っていた資料は、現在すべて旧相馬女子高校の校舎、あるいは県南の白河市の福島県文化財センター白河館の架設収蔵施設に入っています。

その後、二〇一四年六月に富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチームを設立しました。組織としては、副町長をトップに現在十七名の構成です。当初は十五名だったのですが、その後、希望して参加してくれる職員もあつて増えています。幹部に教育総務課長、企画課長、産業振興課長、生活支援課長、企画課長補佐が参加し、実働部隊では主任学芸員の私と、産業振興課兼務の門馬学芸員、総務課員二名、生活支援課員が三名、教育総務課、健康福祉課、産業振興課、住民課と各課を横断したかたちで地域資料・震災遺産の保全に関わる作業を行っております。

これまで十九回（十七軒）のお宅で資料保全を行いました。整理作業につきましては、福島大学と合同で、これまで七回行っています。

このプロジェクトチームの任務を紹介させていただきますと、「歴史保存PTは、富岡地域が自立的に続けてきた生産活動への具体的な考察を行い、その成果をまとめて町民をはじめ、国内外に発信する。また、資料調査や資料救出及び資料整理・保存など必要な庶務を行い、地域の歴史・文化の保存を図る」としています。地域資料ということで、地域的な「価値」を見いだしながら保全作業を進めています。

続いてレスキュー作業の流れについてですが、今から三十年ほど前の『富岡町史』編纂の際に使用された資

料の所有者に連絡を取る、あるいは、町内で解体除染が進んでいます。解体除染を申請する方にこちらから連絡を取るなど、情報を集めて調査・レスキュー作業に進みます。町有文化財の搬出により、町内の収蔵庫が空きましたので、そこに保全した資料を入れて、一旦、線量の計測してから郡山市内に持つてきて、資料整理をして、再度、町内の収蔵庫に戻し管理をする流れです。その中で資料の活用、公開が大切であるとの認識から、展示会や、シンポジウムなどの事業を継続的に実施しています。

先ほどの基調講演の中でも取り上げていただきましたけれども、現在、富岡町内に住民がいない状況で、地域の資料がどう住民の皆さんとつながりを持つかということ、そして、活用を通してどのように使われていくかということを私なりに考えながら活動を進めています。町民のアイデンティティの担保、つながり維持の材料、そして、地域資料は地域性を示す「そのもの」ですので、そういったものも含めて今後の資料の活用と展開を考えていきたいと思っています。地域的な「価値」を見だし、いわゆるお宝鑑定団に出るようなものだけが歴史資料ではなく、あくまでも地域の「ありよう」が分かる資料の保全を進めています。

次に展示の概要をお話したいと思います。昨年の八月の協定締結式の写真、そしてそれに伴う富岡町と福島大学の合同整理作業の写真、整理作業中に小松先生が学生へ資料の読み方を教えている写真、右下の写真は今年に入って町内の資料レスキューに先生方にも加わっていただいたときの写真になります。

ここからは展示のご紹介ですが、まず最初に大原弘道家資料をご覧ください。大原弘道家（大原本店）は近世の富岡宿の西の入り口に位置し、現在まで中央商店街の顔ともいえる商家です。宝暦年間に醤油と味噌の醸造に発して、近代に入ってから呉服商も始めています。商家ですので、大福帳などの経営帳簿類を

二〇一四年の七月二十四日の最初の保全活動で大量に保全しました。その後、整理作業を進めていくうちに、『富岡町史』の「決算下調査」出てくるなど、経営の実態が今後の調査で明らかになる可能性が高くなりました。ちなみに『富岡町史』では富岡羽二重工場の写真を掲載していますが、詳しい実態までは触れていません。地域の歴史がどのように展開していったのかということを改めて知る手がかりが得られました。

合わせて、展示台の上には、昭和の時代の写真や、地域の実情を写した昭和十年代の富岡町内の富岡地区と夜の森地区二カ所の市街地の暮らしを写した写真も地域資料として展示されていますのでご覧いただきたいと思っています。

続きまして、大塚博巳家史料群をご紹介します。二〇一四年十二月二日に保全した資料で、こちらは『富岡町史』の中でも紹介されている安政五年の「往来手形」を所有されていることから資料保全をさせていただきましたが、その他に一九〇九（明治四十二）年の「由緒書」もあり、こちらについてご紹介をさせていただきます。

大塚家は、ご当主のルーツが越後国小千谷にあり、現在の新潟県から幕末維新期に富岡地域に移ってこられたそうです。自分たちが新潟から富岡の地に来たことを、後世になって「由緒書」として書き起こす作業を明治の時代と昭和の時代に行いました。なぜ自分たちがこの地に存在しているのかということの後世になって振り返っていることがわかる資料になっています。

現在、富岡町内に誰も住んでいない状況、準備宿泊は始まっていますけれども、これから帰還が始まるという状況の中で、自分たちの立ち位置を町内に住んでいた方が振り返る意識が震災よりもずっと以前にもあった

ということが知られる資料になっています。

次に見ていただくのが、佐藤一光家史料群ですが、佐藤家は富岡町内でも一番古いお宅のひとつとされています。資料の中には宝永三年の下手岡村検地帳が含まれていましたが、今から三十年前に町内の諏訪神社に佐藤さんが「古いものを一括して預けた」ということで情報をいただき、我々がコンタクトを神主さんに取って資料保全に向かいました。結局、台所のすぐ横の袋戸棚のような場所に箱に入って保管されていたものを門馬芸芸員発見した資料です。

富岡町内では検地帳が、これまで下郡山文書にあったのですが、それ以外にもうひとつ発見されたことになります。宝永二年に手岡村が上手岡と下手岡に分村していますが、その翌年に行われた検地の史料を読み解いていことで、富岡地域の生産性がより明らかになることから、今後の展開が楽しみな資料になっています。

佐藤家につきましても、家系図、由緒書ということで、中世に富岡に入って以来の由緒を書き起こしてたものです。

続きまして、宇佐神幸一家（諏訪神社）史料群のご照会をさせていただきます。宇佐神家（諏訪神社）は、二〇一四年十一月十八日、二〇一六年八月十六日の二回の保全活動を行っております。今年の八月十六日については、先ほどの佐藤家の資料を保全したときと合わせて資料保全活動をしております。昔から地域にある古いものが残る場所として神社とか寺院というのが思い浮かぶと思うのですが、地域で古くから親しまれてきた諏訪神社には神社にしかない資料があるということから神道裁許状をご紹介させていただきます。

この裁許状は、神主さんが代替わりした際、中央から認められた許可証で、浅査を履いていいですよとか、

装束を着ていいですよということで、中央から許可を得た文書が展示されております。着る物についても許可が必要だったことが分かる史料です。合わせて、今回展示の中でご紹介をさせていただいているのは送魂の祝詞で、明治二十九年の日清戦争のときに読まれたものと思われまします。この地域でも日清戦争のときに出征して亡くなった方がいらつしやったということがわかる史料になっています。これだけではどこの誰が出征して亡くなったかというのはいちよつと読み解けません、今後さらに他の資料が出てきて関連づけされると、町内で当時どのような動きが、日清戦争と関連してあったかということが掘り下げられていくことからご紹介をさせていただきます。

次に石山功家資料群のご紹介をさせていただきます。二〇一四年十二月二日に保全活動を行いました。石山家は、幕末期に上手岡地区に移り住んで鉄山の経営に携りました。棚倉から移ってきたということなのですが、一八六六（慶応二）年以前は白河藩士で、転封によって棚倉藩士となりました。棚倉藩の政策により上手岡鉄山の開発・創業のためにこちらに移り住んだ石山佐一郎のご紹介をさせていただきます。

富岡といいますと、磐城平藩領とか、天領というイメージが強いのですが、棚倉藩との関わりも富岡の西方、上手岡地区に非常に棚倉藩の影響を与えたことを紹介をさせていただきます。後に石山佐一郎は明治十三年、この村の戸長に就任し、二十二年には上岡村村長、西側の川内村への街道改修など地域経営にも尽力をしています。

富岡には土着せず白河に戻った佐一郎の父・斎兵衛と佐一郎の往復書簡が大量に出てきましたので、こちらでもご紹介させていただきます。

最後に関根義弘家史料群のご紹介をさせていただきます。二〇一五年五月二十六日に保全しました。このお宅は、近世・近代の和算家、関根熊吉の史料を受け継いできました。和算は江戸時代の数学で、問題を漢文の縦書きで解きました。熊吉は和算家でしたから、算学に関わる資料が大量に出てくるのかなと予想しております。実際、算学の教本も出てまいりましたが、ここで私たちの目をさらに引くものが出てまいりました。それは軍事郵便でした。中国に出征した夫が妻に送った手紙があり、母親には、自分は立派な息子として兵役に出ている姿、伍長になったので心配しなくてもいいよというような文面の手紙がある一方で、同じ封筒に入っていた妻宛ての手紙は、自分の心情を素直につづったものでした。自分の親に対する自分の心配をさせない心情を記した文章と、自分の妻子に向けて送る文章のコントラストが印象的です。同じ封筒に入っていた全然異なる内容の手紙を読み比べることで、当時の家族観や現在と共通する価値観などが読み取れると思います。その意味で、地域と戦争を考える際の大変重要な資料になってくるのではと考えております。

なお、この関根家史料については、小松先生が本書九十五ページで、整理作業に当たる学生さんたちの様子も踏まえてご紹介をしています。合わせてご一読ください。

最後になりましたが、私なりに地域の資料を残す意味ということで、一言お話をさせていただいて報告を終えたいと思うのですが、やはり地域と、今現在、富岡町は町内に避難指示が出ている状況ですが、震災が起くる前までずっと当たり前のように地域の人々が暮らしていた中で、避難によって地域に突然人がいなくなってしまった状況。そこを起点に富岡町のこれからの復興を語るのではなくて、それ以前の富岡町での暮らしが、震災によってどういうふうに影響を受けて、これからどう歩み出すのかということを語っていくことが大切だ

と思います。そのためには、どうしても地域の歴史を踏まえなければならぬと思っています。写真ですとか、古文書など地域の人々の「ありよう」を示す資料を保全しながら、富岡町が今後どう歩みを進めていくのか考えていきたいと思います。

以上になります。ありがとうございました。

「歴史資料の保全活動に参加して」

福島大学行政政策学類四年生 佐藤新

○報告部分

ご紹介にあずかりました福島大学行政政策学類四年の佐藤新と申します。このシンポジウムについてちょうど一カ月ほど前に阿部先生からシンポジウムで話をしてくれないかとお話をいただきました。最初は「はい、わかりました」と返事をしたんですが、この日が近づくにつれて事の重大さにプレッシャーに押しつぶされうになつておりましたが、「歴史資料の保全活動に参加して」ということで、一緒に活動してきた仲間を代表して、その中で感じたことをお話しできればなと思っております。

私が初めてこの活動に参加したのは、現在のゼミナールに所属することが決まっていた二年生の二月ごろでした。これまで計六回ほど活動には参加をさせていただきました。学生として担ってきた活動は「資料の撮影」

と「目録の作成」に分けられます。

「資料の撮影」では、救出された資料のほこりを払い、資料ごとの資料整理番号を振り、その後、デジタルカメラと三脚を使って資料を一点一点撮影していきます。大型の掛け軸であるとか、壊れやすい資料も多々ありますので、数人で協力しながら丁寧に撮影をしていきました。

一方で、「目録の作成」の班では、撮影が終わった資料を、年代・内容などを読み取って適切な標題をつけていきます。資料の年代は、明治時代であるとか、戦中・戦後、現代までと幅広くありました。手紙や取引の領収書をはじめ、絵はがき、日記であるとか、学校のアルバム、通知表など、さまざまな種類が資料として保全されていました。やはり通知表やアルバムなどは、私たちも身近に感じるものがあり、とても興味を引かれました。一方で、撮影が終わった資料が次々とたまっていくため、じっくり資料一点一点を読んで楽しむということもなかなかできず、この作業自体、目録を作成したものを寄託された方にお渡しするということもあり、学問として資料に触れながらも、楽しみつつ、効率的な作業を意識して活動していました。

やはり、くずし字であるとか旧字体の読解には苦労しました。書き癖であるとか文字のかすれなどもあるため、初めて参加したときはまったく読めませんでした。しかし、大学の授業で学んだ古文書講読であるとか、活動に参加してきた経験であるとか、やはり辞書を片手に文字と格闘した経験で文字が徐々にわかるようになってきたということがありました。歴史資料の難しさであるとか面白さというものをダイレクトに感じることでできました。

歴史といいますと、文献を読んだり博物館などの収蔵品を見学したりということが当たり前であると思って

いました。しかし、この活動では史料に触れて学ぶことができます。もちろん授業でも古文書を読みますが、やはり本物にじかに触れさせていただき、その筆づかいを間近に見るといことがこの活動の魅力でもあり、読み解けたときの達成感は特別なものがあります。また、私自身、学芸員資格取得のために学んできた部分もあります。授業で学んだことを実際に資料を用いて実践できるという機会がなかったため、とても貴重な経験だったなと思っております。

また、普段、大学でも富岡町のような資料整理作業を行っておりますが、この中にはがきや領収書など文書を扱うことが多いのですが、富岡町の活動では、アルバムや日記、絵はがきであるとか、珍しいものですと甲冑であるとか刀など、さまざまな種類の資料を扱わせていただきました。普段の活動とは異なる新鮮な感覚で作業をさせていただきました。このジャンルの多さというものも、富岡町のこれまで発展してきた歴史を語る上で面白いポイントなのかなとも思いました。

この資料保全活動に参加して、歴史の新たな側面を見ることができました。これまで歴史といいますと、学校で科目の中で歴史として触れることが多かったのですが、歴史というものがこうやって地域の中で生かされていくということを実感できました。この保全作業を通じて、整理した資料の中には当時の富岡町の様子を今に伝えるものがたくさん存在しましたし、写真や日記など絶対にこれは教科書にはなかなか載らないものもあり、当時のリアルな人々の暮らしを私たちに伝えてくれました。

特に印象に残ったものは、今回の展示でもあるような戦時中の日記などでした。当時の出来事が、その人が思った言葉で克明に記録され、書いた人の本音がそのまま記録されていました。また絵はがきは、絵も多くあ

りましたが、写真も多く、例えば東京駅の昔の風景ですとか、銀座の町並みであるとか、当時の日本の風景がそこには描かれており、目録をつくりながらもついつい見入ってしまうということが多々ありました。こうした発見は保全活動をしなければわからなかったことであり、貴重な経験だったなと思いました。

また、この富岡町の取り組みでは、町に残る貴重な歴史資料を後世に伝えるということに加え、先ほど三瓶さんからのお話もありましたが、震災によって地元から離れなければならなくなったコミュニティをつなげるという意味もあわせ持っています。保全活動の成果を、今回、同時開催している展示のように皆さんに見ていただくことで、皆さんが富岡町で生活してきた証を多くの人々につなげていけるのかなと思いました。また、どんな資料を整理してきたか、参加者として実際に成果として見てみたいなと思う部分もあります。そのお手伝いがこれまでできたのかなと思いました。

これまでの活動において、先ほどの三瓶さん、門馬さんをはじめ、富岡町の役場の皆様の活躍がすごいなと思います。本来の業務もあり、とてもお忙しい中でも、この家の資料はどういう家の資料なのかであるとか、熱心に指導してくださいました。やはり富岡町のことをとても大事に思っているのかなと感じました。

以前、活動の中で、本来はこの資料整理作業に町民の方も一緒に参加してほしいというお話を耳にしました。自分もそれは同感で、やはりこれまでの活動では学生と教員、役場の方とボランティアの方での活動が多かったです。時期によっては学生の人数も少ないということもありました。やはり地域につながりをつないでいくというためにも、町民の方にも参加してほしいなと思いましたし、そのためにも、まずは活動を知っていただきたいなと思いました。どうしても歴史といいますと興味を持っていただきづらいテーマだとは思いますが、

なかなか興味のない方に参加していただくということは難しいことでもあるかなと思います。しかし、今回のような展示はぜひ見ていただきたいなと思いましたし、活用しないと保全した資料を再び眠らせてしまうということにもなります。見ていただくことでこの資料を保全する意義というものも出てくるのかなと個人的に思いました。

最後になりますが、私自身、歴史を勉強している身として、このような保全活動は、ほかではなかなかできない経験、できないことばかりで、私自身、経験値が上がったといえますか、とても貴重な経験をさせていだいていたのだなとあらためて思いました。私も徐々に卒業するのが目に見えてくるようになりましたし、やはり学生はいずれ卒業してしまいます。なので、これまで活動を通して得た経験であるとか、一緒に活動してきたボランティアの方々との経験を、後輩など次につないでいかなければならないなと思いました。こうやってシンポジウムを通じて語り継ぐことで、富岡町のこの歴史が、富岡町の帰還が達成されてからでも人々に伝わっていければ、私たちもお手伝いができてよかったなと思いました。

つたない報告ではありましたが、以上で報告とさせていただきます。ありがとうございました。

「富岡町の歴史資料に接して」

歴史資料保全活動参加ボランティア 菅家 美和子

ボランティアの菅家美和子と申します。私は、昨年十二月二日に行われました富岡町の歴史資料保全活動にボランティアとして初めて参加しました。その約二カ月前から福島大学で行われている「ふくしま歴史資料保存ネットワーク」での被災史料の整理作業に参加していましたので、その活動のひとつである富岡町の保全活動にも参加することになりました。それ以降は、郡山市に住んでいるということもあり毎回参加しています。

このふくしま歴史資料保存ネットワークの存在や活動につきましては、たまたま見たテレビや新聞の記事で知っていました。そして、出身の福島大学の学生が保全活動の中心となり活躍していることを頼もしく思っていました。さらに昨年、朝日新聞で連載された「プロメテウスの罠」の中で、「文化財SOS」として書かれた三瓶さんや門馬さんたちの活動の記事を読んだことも、富岡町の状況を知り関心を持つきっかけとなりました。

た。

また、震災後に双葉郡内の歴史資料館や民俗伝承館などから救出され、白河市の福島県文化財センター白河館、通称「まほろん」の仮収蔵施設に搬入された文化財が、後に企画展で展示されたことがありました。見に行きました時に解説ボランティアの方が説明をしてくれましたが、「浜通りの人たちがたくさん見に来てくれるのですが、ほとんどの人は、これらを見て涙を流すんですよ」と言われました。その立場になってみなければ、苦しさや悲しみはわかりませんが、胸がいつぱいになりました。

強制的に避難させられ、県内外にばらばらになってしまった被災地の人たちにとって、これまでの人々の暮らしの中で地域に伝承されてきた文化財や歴史資料は、ふるさとを思い、自らのアイデンティティーや心のよりどころを求める人々と地域を繋げる大切な資料だと思います。これらを保全し後世に繋げていくことは、町の歴史を記録し、今後のコミュニティの再生を目指していく上でも大きな役割を持つものだと思います。

私は、歴史や美術品を鑑賞するのが好きだということもありましたが、保全活動のボランティア募集を知り、少しでも被災地の復興のお手伝いができればと思い参加することにしました。

整理作業は、富岡町教育委員会がある郡山市桑野の旧法務局で行われます。当日の整理予定の資料について説明を受けます。資料は、古文書をはじめ紙の資料が多いですから、時代や紙の材質やこれまでの保存状態によりますが、傷んだり弱ったりしているものも多く、丁寧に扱っていかねばなりません。決まった時間でクリーニングやデジタル撮影、目録整理と、流れ作業で次々と整理していきますので、手に取ってじっくり資料を見るということは難しいですし、特に古文書のタイトルや、古い資料には読み取れないものもあり、先生

や学芸員の方に聞きながら記録をしていきます。また、お札の版木などがたくさん出てきたときは、たまったほこりを払い落としながら、いつの時代のものなのかとか、いろいろな内容の版木があるとか、再び人の目に触れて保存されることになってよかったなどと思いながら作業をしました。古い時代の資料は、その地域で果たしてきた役目や家業に関したものが多く、近年になると、生活が感じられるようなものがあると思っています。そうした中でも、古い写真などが出てくると思わず手が止まってしまいます。その家の歴史をつくってきた先祖や家族の写真を見て、この地でつないでいくことができなくなったこの家の人たちは、今どこに住んで、どのように暮らしているのだろうかと思いました。

さまざまな資料は、先祖が残されたその家の歴史を物語るものですが、個人宅の価値のある資料というだけでなく、その地域の歴史にとっても貴重な資料となるかもしれません。言葉が適切でないかもしれませんが、震災を機に掘り起こされた新たな発見となる資料があると思いましたら、これらの活動をする意義も大きいと思います。

一方、これまでの活動に関わってきて、他の被災地での特に個人所有の資料救出がなかなか進んでいないということも感じてきました。マンパワーの不足や救出しても収蔵する場所がないなど、理由はさまざまあるということです。震災から五年半が過ぎましたが、建物の損傷や解体が進み、資料の劣化や処分などの心配もあると聞きます。そうした中で富岡町のこれまでの取り組みは、一歩先を行くものだと思います。行政と歴史研究に携わっている専門家の方々や、大学や住民との連携を生かしながら、今後の被災地での歴史資料保全活動の牽引役としての役割を富岡町に期待しています。

これは、ふくしま歴史資料保存ネットワークでの活動でしたが、二〇一二年から始まり今年で四回目となる平成二十八年度の被災資料記録整理の夏季集中作業が、八月二十七日の土曜日と二十八日の日曜日の二日間わたって福島大学でありました。私は初めての参加で、それも一日だけでしたが、県内ばかりでなく、遠くは愛知県や東京、埼玉などの県外からも、専門家の方や大学生や、一般の方もボランティアで福島を支援していただいていることを知り驚きました。近年は、国内各地でたびたび大きな自然災害が発生し、市民生活に及ぼす被害も甚大ですが、文化財や歴史資料なども深刻な被害を受けているところも数多くあります。県内外各地で広くつながるネットワークの大切さを学びました。

今回の富岡町と福島大学の連携した保全活動もそうですが、このように関係者が地道にさまざまな活動に取り組んでいることを地域の多くの人たちに知ってもらい、関心を持つきっかけとなり、少しでも活動への理解と市民の方々の参加につながっていくことを願っています。

これに関してですが、私は、ボランティアに参加する前に、大学でやっている文化財や歴史資料の保全活動と聞いて「敷居が高いな」という感じを持っていました。何かの知識が必要なのかしらとも思い、参加するのを少しためらいました。一般の人の中にも関心があり、参加をしたいと思っても、二の足を踏む人がいるかもしれません。具体的にどんなことをやるのかとか、一般の人ができる活動なのかとか、地域の文化財を自分たちで守りましょうといったような呼びかけも大事なのではないかと思っています。

私は、これまで富岡町に行ったことがありません。知り合いの方もいませんでしたが、震災を機に身近に感じてきた自治体です。この歴史資料保全活動のほかにも、別の支援活動で郡山市内の仮設住宅に行きました。

市内を車で走っていると、「富岡町」とか「富岡町社会福祉協議会」などと名前が入った公用車に出合うことが時々あります。そんな時は、「富岡町頑張れ」とエールを送っています。

私は、震災直後の大変な時期には活動には関わっていませんし、ボランティアの期間が一年あまりしかありませんが、これまでの経験と感じたことをお話しさせていただきました。的を射ないところがありましたらご容赦いただきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

「内と外からみた歴史・文化等保存プロジェクト」

埼玉県杉戸町役場・他自治体復興支援職員・

元富岡町歴史・文化等保存プロジェクトメンバー 吉岡 崇

今回このような機会を設けていただき報告することになりましたが、何を話そうかと非常に悩みました。今回の企画展のテーマである「なぜ地域資料を保存するのか」をもとに、私自身、「内と外から見た歴史・文化等保存プロジェクト」について報告をするわけですが、私は学芸員ではなくて、専門知識というものがまったくない一般的素人の目線でプロジェクトチームに参加させていただきました。なので今回、私の報告につきましては、本当に一般的な素人的な目線で経験談等を踏まえた形の報告となりますので、気軽に聞いていただければと思います。

まず、内から見たプロジェクトですが、私はメンバーとして平成二十五年から今回のレスキューに関わらせていただきました。平成二十五年につきましては、まだプロジェクトチームというものが起ち上げられておりました。私は当時、住宅支援係員として三瓶主任学芸員とともに業務に携わっておりましたので、そちらの業務の合間を縫って、外部の専門的な知識のある学芸員さんたちと、双葉町や南相馬などに出向いてレスキューに参加させていただきました。

私の個人的な経験談になりますが、今回この未曾有の震災と原発事故に伴う公有文化財の保存プロジェクトというものは前例がないものですから、やはり地域資料保存に対することの重要性は、多くの有識者、専門家の方々は理解していたのだなと実感しております。そういうこともあり、多くの専門家が、当初やはりレスキュー等には参加していただいたのですが、やはりそういう方たちをまとめてレスキュー業務に携わるということは非常に労力がかかることだったのかなと、今考えると思います。

そして、平成二十六年に行政主導でプロジェクトチームが発足されることとなります。行政が中心となりますが、このプロジェクトチームは、三瓶主任学芸員、門馬学芸員といった知識が非常に豊富な方たちがいる反面、私やほかのプロジェクトメンバーというものは、まったくといっていいほど専門知識というものがありませんでした。なぜそういった専門知識のない人たちがこういったプロジェクトチームに参加したのかというふうに私なりに考えると、やはり、地域資料を保存することの重要性、郷土愛といえますが、そういうものが重要であるとみんなが思っていたからこそ、このプロジェクトチームに賛同いただけたのかなと思います。ただ、専門知識のないプロジェクトチームにおける問題としましては、やはり専門知識を持った人たちが少ないと、いくらレスキューをしても、それを消化することができないという問題が突きつけられていたのだと思います。

そんな中、昨年、平成二十七年年度福島大学との協定で、学芸員の卵といいますが、大学生等と協力させてい

ただまして、専門知識を持った人たち、かつネットワークの軽い行政職員が密になってこのプロジェクトを起ち上げたということになりました、非常にメンバーとしては鬼に金棒といえますか、今後このプロジェクトがより発展していけばいいのかなというふうに感じておりました。

私自身、内からメンバーとして見たプロジェクトチームは、年々日を増すごとに成長していると感じております。その一方で、外から見たプロジェクトチーム、外から見たというのはどういふものかといいますと、私はもともと埼玉県杉戸町の職員でして、富岡町とは友好都市協定を結んだ自治体の職員でした。平成二十五年から三年間、派遣業務として富岡町に従事させていただきましたが、その支援者としての視点から今回のプロジェクトを考えさせていただいたところ、やはり地域資料を保存することの重要性をどうプロジェクトと関係ない人たちに発信していくか、これが一番重要なことなのかなと思います。

やはり歴史資料等に興味のない方というのは、非常に私自身、支援者の視点からも多く見受けられます。午前中に行われたギャラリートークの中でも、「失われていく資料」というキーワードがやはり私の中では非常に心に刺さったのですが、昔の資料というものは、現代に見ても読み取れなかったりすると、やはり捨ててしまったりすることが多々あるかと思えます。ただ、そういう昔の資料というものは本来に必要なものであると思います。

私は、政治学をメインで学んでいるのですが、昔のドイツの大統領にヴァイツェッカーという人物がおりました。この人が「過去に盲目な人間は、現代に対しても盲目である」という言葉を残しています。ドイツといえばユダヤ人大虐殺の過去を持っています。過去に盲目になってしまうと現代に対しても盲目になるというこ

とは、将来以降を考えるにあたっては、過去の資料とが非常に大事である。そういうことを私は、政治的な視点から見ても必要なものだなと感じておりますので、資料保存の重要性というものはとても考えているのですが、最初に言ったとおり、発信の仕方というのが非常に難しいです。どう興味の無い人に興味を持たせるか、これはプロジェクトチーム及び学芸員の腕の見せどころなのかなと思います。いかにメッセージ性のある優れた地域資料であっても、それがしかるべき場所、しかるべき配慮をもつて公開されなければ、世の中の多くの人に伝えることが非常に困難であると。貴重な地域資料の価値を多くの人にきちんとした理解を持つて認識してもらうためには、ふさわしい場所づくりや演出が、プロジェクトチーム、学芸員、また関わった人間の使命なのかなと思っております。

つい先日、私が広島市を旅行した際に、原爆ドームと原爆資料館を拝見しました。その中では、原爆の悲しさ、過去に起こった教訓というものが、やはり血なまぐさく展示されているのです。ただ、過去の地域資料で、教訓だけではなくて、富岡町の齊藤副町長がよく「地域資料を保存することは心の復興だ」という話をしておりますが、広島市の原爆資料館にも私の考える心の復興というものが展示されていました。それは何かというと、広島市の路面電車です。路面電車は、原爆が落とされたわずか三日後、女学生の力をもつて復興されたということです。そういった経緯もあるからこそ、現在、広島市の人たちというのは路面電車をこよなく愛しているようです。それと同様に、富岡町も同じことがいえるのかなと私自身は考えております。

原子力発電所の事故で悲惨な思い、苦しい思いをたくさんした人たちは、私も業務に携わっている中でたくさん見てきました。その中で、教訓を学び未来につなげていくためには、やはり地域資料、昔、何があったの

か、麓山の火祭りがありましたし、そのほかにも夜の森の桜もあります。それ以外に過去どういった生業があったのか、地域のアイデンティティというものを掘り下げること、あらためて心の復興につながるのだと思います。そして、教訓から学び、将来に生かすことができるのだと私は個人的には考えております。

私自身、内と外から見たこの保存プロジェクトについてですが、日々発展しているものだと思います。それが今後ともよりよい形で発展して地域の復興になっていただければと思いますので、陰ながら私自身も協力をさせていただければと思います。

つたない報告で大変申し訳ないですが、以上で報告とさせていただきます。ありがとうございました。

「地域の歴史資料の保全活動に期待すること」

富岡町民資料寄託者・中央商店街 大原 弘道

皆さんこんにちは。ただいまご紹介をいただきました資料寄託者の大原弘道と申します。

今回のプロジェクト活動に期待することというテーマをいただきました。まず、今回の取り組みにつきまして、町からの協力依頼を受けて最初に思いましたことは、「いいことを始めたな」ということでした。避難生活が始まって三年ちよつと経過した平成二十六年六月ごろのことで、町民の多くが早期の帰還は難しいと感じ始めていた頃で、誰もが我が家に残してきた家財をはじめ思い出の品々を、「そのままにしておけば損傷が進み、どうしようもなくなってしまう」と思いながらも、持ち出してくるにしても、仮設の住まいではどこに置いたらいいのか分からない、そういった状況の頃でありました。そんな頃でしたので、また私自身も、以前、町の文化財保護審議委員だったこともありまして、連絡が来てすぐに「OKだよ」と返事をさせていただきました。

そんなことから、私のところが一番最初の資料の搬出先となりました。私も現在は郡山にありますが、そのときは自宅に帰って立ち会ったわけです。七月末のころでした。まだ除染も十分でない頃に、給食センターの四トントラックが入ってきました。三瓶君たちスタッフが、防護服を着用しながら、真っ暗な電気もつかない土蔵の中に入りまして、懐中電灯を頼りに作業を行いました。もともと土蔵の中に乱雑に積み込まれていた資料が、地震によってなお散乱している中での搬出作業だったことを思い出します。現在、避難生活が始まって五年七カ月が経過いたしました。富岡町では昨年の六月に、町民一人一人の心の復興、町民の心をつなぐふるさと富岡の復興、これを基本理念とした帰還に向けての「第二次復興計画」が策定されまして、早ければ来年四月の帰町開始を目指しているところでございます。

そして、この帰町計画の中には三つの基本目標が掲げられておりまして、第一は安全安心な生活の再生、第二は定住の促進、そして、第三は富岡の文化と絆の再生と継承であります。この第三の目標、富岡の文化と絆の再生、継承、これは、避難生活によって分断されてしまった町民のコミュニケーションを取り戻す上で極めて重要な目標であると思っております。

今回のプロジェクトの地域資料を後世に継承するという目的も、町のこの基本目標に合致するのではないのかなと、考えております。町が今年に入って行った帰町に関するアンケートの中間報告では、町に帰ると決めた人、帰らないと決めた人、また判断できないと考えている人、さまざまでありますけれども、アンケートの中では半数以上が帰らないという結果が出ております。しかし、この帰らないと決めた人たちも、ふるさと富岡を捨て去ったわけではなく、自分が生まれ育ったところは忘れたくない、何らかの心のつながりは持ってい

たいと考えている人が多いのではないかと私は思っております。この捉え方は人それぞれに違うのかもしれませんが、単に自分が生まれ育った場所ということだけではなくて、そこには長い間培われてきた人と人とのつながり、絆があり、そして、生活文化があるわけで、それが継承されていくところにふるさとの再生があるのではないかと私は思っております。

避難生活が長引き、ややもするとこのふるさと富岡への思いが薄れつつあるとき、町民の心をどのようにしてつなぎ留めることができるのか。そして、継承面を考えたとき、その主役となるのは現在の子どもたちになるのかなと思います。その子どもたちにどのようにして郷土愛を育むことができるのか、そして、復興への意欲を喚起することができるのかなど課題も多く、大変な取り組みになると思いますけれども、このプロジェクトが、ぜひふるさと富岡の再生につながることを期待したいと思っております。

以前、三春町に現在開校されております富岡の小学校・中学校の総合学習で、富岡で行われてきた祭りや夜の森の桜などについて話をしましたが、そのときに感じたのは、富岡の記憶が相当薄れてきていることでした。震災時にはまだ低学年だった子どもたちには当然の事ですが、時の経過とともに薄れていく記憶をつなぎ留めることの難しさを痛感してきたところでございます。

さらに、これからは、震災前の町の記憶を持たない世代が増えていくことになります。その辺にどうプロジェクトとして対処していくのかも課題なのかなと思っております。このプロジェクトを通して、「ふるさとを想う、まもる、つなぐ」ことの大切さが醸成されますことを大いに期待して、私の報告とさせていただきます。ありがとうございました。

コーディネーター

阿部 浩一（福島大学行政政策学類教授・富岡町文化財保護審議会会長）

パネリスト

徳竹 剛 三瓶 秀文 門馬 健 佐藤 新

菅家 美和子 吉岡 崇 大原 弘道

（阿部） 福島大学の阿部と申します。よろしくお願いいたします。時間は一時間少しですが、話しているとあつという間に終わってしまいますので、できるだけ色々と取り上げていきたいと思っています。

本日は「なぜ地域資料を保全するのか」という非常に大きな題を掲げました。我々は当事者ですので、日々色々なことを考えながら活動をしているわけですが、今日おみえの皆様の中には、こういうことを初めて聞くとか、初めて考えるという方もいらっしゃると思います。シンポジウムというのは、色々な講演や報告などを受けて、ともに考え、そこで「得られたこと」を共有すること、そして色々なマスメディアの力も借りながら、今日来られない方々に「共有した想い」を発信していくことも大事であり、そうしたよき成果が得られればと思っております。ぜひ皆様からも積極的な発言をお願いできればと思います。

今日は特に、地域資料を所有されている方、その保全に主体的に取り組んでいる自治体の職員、そしてその活動を外から支援する我々大学やボランティアの皆様を含めて、三者が出そろいました。普段はなかなか接点がなく、今日はこの三者が一堂に会する非常に貴重な場でもありますので、ご講演いただいた先生、あるいは報告いただいた皆様と色々と意見交換をして、ぜひ充実した内容にしていければと思っております。

先ほど来、皆さんは非常に大きな、大きなことをたくさん言っておられますが、今回の展示は「ふるさとを想うまもる つなぐ」ということです。この三つの大きな柱を手掛かりにしながら、登壇者のほうで意見交換をさせていただきたいと思っています。

まず「想う」。ふるさとへの想いについてです。大原さん、三瓶さんのように富岡とずっとともに暮らしてきた方もいれば、私も含め、それまで富岡町とはあまり接点がなかった、あるいは震災後に初めて接点を持つたけれども、「富岡」に自分のふるさとと同じような感覚を持って、今、接していると思います。そうした「想い」というあたりから考えていきたいと思っています。

まず初めに、この登壇者の中で門馬さんだけが、皆様の前でまだ何もお話しされていません。三瓶さんとともに門馬さんが牽引役としてずっと引つ張ってきましたので、こうした活動に取り組む想いからお話をいただければと思います。よろしくお願いします。

（門馬） ありがとうございます。富岡町役場の門馬でございます。午前中、ギャラリートークをさせていただきました。聞いてくださった方、ありがとうございます。

今、阿部先生から活動への「想い」という話がありましたが、私自身、別に富岡町の出身ではなく、実は震災前は福島民友新聞社の記者をやっており、原子力災害による両町村の避難を契機に富岡と川内という二つの自治体を担当することになりました。記者として、避難してきた町民の方々にたくさん話を伺ったわけですが、その中で、「自分たちの古里ってどうなるんだろう」という不安や、「なかなか大きな声で避難してきたと言いつらいんだ」という方々の話を聞くうちに、実はアイデンティティを自己肯定できないというのも、ものすごいストレスなのではないかと思うようになりました。

そして富岡町は震災から丸二年間、二〇一三年三月に警戒区域が再編されるまで、全ての地域で町内に自由に立ち入れませんでした。区域再編によって町域の七割程は日中の立ち入りが自由になりましたが、同時に「真つ先に古いもの、汚いものから捨てられる」という懸念が私の中で生じました。

私は学生とき、徳竹さんの後輩として古文書の整理を随分やりました。その経験として、歴史に興味のない人にとって、「家にあつて生活にすぐ必要ないもの、汚いもの」の代表格が古文書なのかなという感覚がありました。しかし、古文書は地域・家・人のアイデンティティ、人々が紡いできた歴史そのものだとも思っていたので、これが捨てられたら今まで取材で聞いてきた人たちの心・アイデンティティはどうやって救えるのか、担保できるのか、とても悩みました。そのころ、偶然に役場の募集があつたので、ぽんと入って、三瓶さんを捕まえて古文書レスキューをやろうと持ちかけました。

ただこれは、「自分は人生を懸けて役場へ入ったんだから、何がなんでもやるぞ」という話で巻き込んでいったうちに、プロジェクトチームができ、実際に大原さんを始めたくさんの町民の方々のご支援をいただいて、

かなりの数の資料が集まりました。しかしさて、史料整理をどうしよう。ああ、福島大学に徳竹先輩がいた。「お願い手伝って」といって、どんどん巻き込んでいったら、こういう形に広がったわけです。

正直、私は最初、自分勝手な問題意識だけで始めたわけです。しかし、ここまで皆さんが協力してくれるということは、それだけ地域や資料を守ること自体に対する皆さんの「想い」があつたし、たぶん実は同じ方向を向いていて、賛同していただけたのかなと思います。最大の賛同者は町民の皆さんですが、これからこの方向性をいかに興味がない人にも向けていけるのか、これが最大の問題だと思っています。この想いをいかに皆で共有していかれるかを意識して、これから活動していきたいなと思いました。

雑ばくな話ですみません。

(阿部) どうもありがとうございます。先ほど色々お話いただいた佐藤さん、菅家さん、あるいは学生たちを含めて、富岡町の地域資料を守ろうと日々尽力しているわけですが、実際に富岡で暮らしてこられた大原さんは、色々な活動をご覧になって、ふるさと富岡を守り伝えることにどのような想いを持っておられますか。

(大原) 私は直接にこのプロジェクトに参加しているわけではありませんので、外野から見るとあるような観点になると思いますが、「ふるさと」の捉え方は、人それぞれだと思います。生まれたときからそこにいて育っている人、短い期間をそこで過ごした人、色々なことによつて捉え方が違うと思います。ある程度、親子何代かの歴史のある家には、それぞれの歴史というものがあります。学術的にはどれほどの資料になるかはわからないにして

も、残っているはず。そして、それは皆、それぞれそこで育った者たちの歴史であって、非常に大切な宝だと思うんです。

ですから、先ほど企画展の中で見て思いましたけれども、手紙がありました。戦争時代の子どもを思う、家内を思う、そういう想いが、家庭の中でずっと受け継がれてきているはず。そういうことを守り、つないできた。そして、そのことが隣近所とか、皆、想いを共有してきた。そこにそれぞれの「ふるさと」が形成されてきたんだと思います。

（原子力災害によつて）ある日突然、そういう関係が分断され、富岡の場合は全国に散り散りになりました。北海道から沖縄の果てまで散り散りになったわけですから、これからこのプロジェクトを通してつむぎ直していくということの大切さとともに、この事業の継続の難しさということを私は感じています。

これは、三瓶君から聞いてはおりませんが、復興関係の予算があつての起ち上げなのではないかなと思いますが、財政面での支援が今後の継続に影響してくると思っております。

（阿部） どうもありがとうございました。最後のところに「継続の難しさ」というお話が出ました。これは我々のような活動をやっていると、どこも同じような悩みを抱えておりますが、昨年結ばれた富岡町と福島大学の協定というのは、活動の継続を担保するものとしては、今後とも有効に機能すると思ひますし、また、有効に働かせていかなければいけないと思ひております。

富岡ですつと暮らしてきた方の想ひもありますし、富岡に対して色々な想ひを持ちながら我々は活動してお

りますが、今度は資料を「まもる」という話題に移りたいと思ひます。福島大学の私もが言うのはなんですけれども、学生たちの力によつて随分と支えられています。

今回、その中の一人として佐藤さんに、これまでの経験や、色々感じたことなどを含めてお話をいただきましたが、学生たちに対して、これからどういふことを期待したいかをお話いただければと思ひます。先ほど吉岡さんが、学生が非常に頼りになると話されました。実際に学生たちの姿を見てこられて、社会人の先輩として感じたこと、あるいは学生に期待したいことなど、何か伺えればと思ひますが、いかがでしょうか。

（吉岡） 実際に私はレスキューをメインでやつていたので、大学生との関わりはあまり多くはありませんでしたが、実際に役場だったり地元の方々と「つながる」実体験をできること、一緒に活動や交流をできることが学生にとっては非常に大きい経験だと思ひます。活動を通じて、自分たちが今取り組んでいる学問・研究はどういった形で地域に役立つのかを実感できているのかなという、いい効果になつていふのかなというのは非常に感じているところではあります。

（阿部） ありがとうございます。学生という若者と地域とをつなぐことの重要性とその効果についてお話しただきました。次の世代という意味では、富岡の子どもたちへの継承として、大原さんも今後色々懸念や不安になると吐露されましたが、大原さんのご経験などから具体的なエピソードがあれば願ひします。

(大原) 継承というのは、具体的には大変難しいのかなと思います。例えば、私は、小学校・中学校などに呼ばれて、地域の伝統文化などの話をしてまいりました。去年は、富岡のNPOがやっている「聞き書きプロジェクト」で、大学生・高校生たちに地域の伝統行事などを話しました。これは一年間のプロジェクトでしたが、最後には一冊の冊子にして、報告になりました。この事業を通して感じたのは、富岡の記憶というのは、今、大学生になつていく方々でも薄れているようです。ですから、日常ずっと毎日同じところで生活していると、それはもう当たり前のことであつて、特別なことと感じていないわけです。ですから、突然そこを離れてみて、そして、初めて自分の居住地のよさと魅力などを感じることができるのかな、そんなことを強く感じました。ですから、文字、活字で伝えることも大切ですが、ある程度、話を通じて、若い世代に富岡のよさ、ふるさとのよさを伝える、そういう部門もあつてもいいのかなと思います。以上です。

(阿部) ありがとうございます。吉岡さん、大原さんのコメントをいただきましたが、もし佐藤さんから何かあればお願いしたいのですが、いかがでしょうか。

(佐藤) 授業など座学で史料について色々と勉強はしましたが、実際にお預かりした資料を扱うにあつて、素人同然なのに扱つてしまつて大丈夫なのか、など色々不安はありましたが、やはり実際の史料を扱う経験をたくさんできたことで自分自身の糧になりました。また大原さんのおっしゃる通り、この「富岡の日常」というのを後世に伝えていくという、重要な試みへのお手伝いができることは、とても貴重な経験だと思います。

そして、学生が一番の魅力であるフットワークの軽さや、仕事量をこなせることなど量的なものでの貢献が一番大きいと思うので、これからも後輩たちに続けていつて欲しいです。

(阿部) ありがとうございます。

今日はお手伝いを含めて、学生たちが随分来てくれております。今回は佐藤さんに代表してお話いただきましたが、今日は所蔵者の大原さんもおみえですし、いつもお世話になつている三瓶さん、門馬さんを含めて自治体関係の方もいらつしやいます。ぜひ学生の皆さんから、普段こんな想いで自分もやつているのだということがあればお話いただきたいのですが、いかがでしょうか。

フロア(小山景子) 行政政策学類四年で阿部先生の研究室の小山景子と申します。今回は富岡町の職員の皆さんに想いを伝えることができるという貴重な機会ですので、お話ししたいと思います。

私も富岡町の資料整理に何回も携わらせていただいておりますが、毎回「手伝つてもらつてありがとうございます」と言われます。逆に、私たち学生のほうが「ありがとうございます」とすぐ言いたいです。なぜかという、私たちは資料保全に関わらせていただいております、地域の史料を未来につなげられることに、実際に自分たちも関わらせてもらつていふと思つていふからです。自信にもなりますし、「やつてきてよかったな」と感じます。自分のやつたことが後世の人たちに「伝える」ためのお手伝いができて非常にうれしく思います。

また、ボランティアなどについて、受け入れる側の体制がないと、ただ来られるだけではかえつて迷惑になつ

てしまうような現状があると思います。富岡町の資料整理に関わってみると、職員の皆さんは、そういうことは全然なく、どっしりと構えているというか、たくましく私たちの力をフルに活用できるように土台をつくってくれていて、毎回感謝しています。やっぱり職員の皆さんがしっかりとやってくれるので、私たち学生もお手伝いに参加でき、力を奮うことができていると思っています。

(阿部) どうもありがとうございます。あともう一人、お願いします。

フロア (渡邊拓) 福島大学行政政策学類四年で徳竹先生のゼミに所属しています渡邊拓と申します。

自分は昨年の二月ぐらいから何回か資料保全活動に参加させてもらっておりですが、太平洋戦争中の大衆生活についてずっと興味があり、卒業論文もその方向で書くこうとずっと思っていました。最初は手広くやっていたので、どの地域を対象にしてやろうか迷っていましたが、この資料保全活動で色々な戦時中の日記などを知り、この機会に保全した史料を使わせていただき、富岡町の戦時中の大衆生活について明らかにしていきたいと思いました。この資料保全活動のおかげで、ダイレクトに当時の日記とかの資料を見ることができています。また、今とても欲しい資料についても、富岡町にあるということで、この貴重な機会があつたからこそ、自分の卒論に色々活かせているので、とても感謝しています。

(阿部) ありがとうございます。

学生の側も色々な意味で自分たちのプラスになって感謝しているというような発言が出てきましたが、そういったことを受け止めて、三瓶さん、どんなふうにお感じになりますか。

(三瓶) 町職員としても町民としても「ありがとう」というのが率直な気持ちです。富岡で生まれ育った者として、先ほど大原さんのお話の通り、これから復興に向かって歩んでいく中で、震災前までどのように生活がなされていたのか、地域資料を通して、過去の暮らしの様子を知るための取り組みに、学生の皆さんに協力いただいている状況です。「資料を色々見せていただきありがとうございます」という話ですが、逆に私からも感謝の言葉しか出ません。こういった関係の中で地域資料の保全がどんどん進められていけばいいのかなと思います。

(阿部) ありがとうございます。お互いにエールの交換みたいになってきましたが、今日お話を伺っていて、富岡の役場の皆さんも含めて優しさみたいなものをすごく感じます。そういったところが学生にも伝わって、それが学生のやる気を引き起こして、それがまた富岡町の皆さんに感じていただけるという、非常にいい相乗効果があるのではないかなと感じた次第であります。

さて、こういう「まもる」活動というのは、私が今代表を務めているふくしま歴史資料保存ネットワークのテーマでもあります。ふくしま歴史資料保存ネットワークは、二〇一〇年十一月に発足し、福島大学や福島県立博物館、(公財)福島県文化振興財団、福島県史学会の四者が呼びかけ人となり、市民参加を促すことで、こう

いう活動を各地で展開できるような仕組みをつくろうと始まったわけです。

ただ、半年もたたないうちに本番、しかも歴史上まれにみるような大災害が起こり、我々もその場をなんとか必死にやり過ごしてきたというところがあります。「市民ネットワーク」を掲げてはいますが、実際はなかなか難しいところがあります。

先ほど最初の講演のところで、徳竹先生が市民の歴史意識という、大きな問題を提示されましたが、やはりそういったものが未成熟の状態で市民ネットワークをつくるのはなかなか難しい。だからといって、この現状をそのままにしておいていいわけではありません。少しずつではあっても、こうした想いに賛同してくださる方たちをまとめていく「ネットワーク」を機能させていかなければいけないというところがあるわけです。

実は、今日ご報告をお願いした菅家さんが、いつごろからどのようにこの活動に関わられたかを、私は初めて聞いた気がします。菅家さんもおっしゃいましたが、「こういう活動があり大事だとわかった。だけれども、参加には少し二の足を踏む」とおっしゃられたと思います。こういう活動に「参加してみよう」という背中を押すような何かがあったのかなと私は思っていて、そういう「何か」が今後、市民ネットワークの裾野を広げていく手掛かりになるうかと思えます。そのあたりを菅家さんに少しお話しいただけますか。

（菅家） 先ほど発表しましたように、私が参加しようと思ったのは、新聞やテレビなどで情報を得たのがきっかけでした。被災地の役に立ちたいというのが一番でしたが、ためらいもありました。一般の方には参考になりませんが、去年、何か知識が必要なのかしらと考えると、去年、学芸員の資格を取りました。それで、活動の

役に立てばという想いがありました。

ですから、一般の方には参考にならないかもしれませんが。私は活動の内容もわからずに、歴史とか美術館に行くとかが好きだということで学芸員の資格を取り、資格を生かすために活動に参加しようと思いました。そういうきつかけがなければ、踏み出せないでいたかもしれません。

（阿部） ありがとうございます。菅家さんは、色々な形で被災地の支援をされておられますが、ほかにはどのような活動をされていますか。あるいは被災地に寄せる想いの変化などがあれば、この機会にご紹介いただければと思います。

（菅家） 私はもともと医療職でした。今は県の委託事業で、医療系支援として仮設住宅に行っています。私自身、福島大学行政社会学部出身で、歴史的なことに興味がありました。もともとの自分の職業である医療職のほうというのは別でしたが、根底にあるのは被災地の支援をしたいということです。

（阿部） どうもありがとうございます。やはり五年以上たちますと、当初のボランティア熱というのはだいぶ低下していて、ボランティアに依拠するのなかなか難しいのは、全国各地の史料ネットでも報告されています。ただ、そういう中でも、この活動をとにかく継続させる努力をこれからもしていきたいと思えます。

さて、「つなぐ」という言葉は、実は非常に多義的です。今回のシンポジウムは「ふるさとを想う まもる

つなぐ」ですから、ふるさとを「つなぐ」、つまり富岡町民と富岡という町、地域を「つなぐ」というところで、地域資料が果たす役割を考えるのが、今回の企画及びシンポジウムの主題であるわけです。ただ、その「つなぐ」というのは、先ほど、大原さんもおっしゃっていました、「人と人をつなぐ」という側面もありますし、ここで何代も暮らしてきた方々の想いと、将来の富岡を支えるであろう子どもたちとをつなぐことにもなるでしょう。また、新しい人間関係がまた何か新しいものを生み出していくといったように、色々な可能性がある。つまり地域資料の保全活動が、多様な「つなぐ」という役割をするのだらうと私は感じているわけです。

そして、先ほど内と外からというお話をいただきました。吉岡さんは実際に富岡町で活動し、今は杉戸町に戻られております。杉戸と富岡の関係について、仲が良いというか、連携関係を随所で見ることがありまして、こういう形でいい関係が築かれて、また次へとつながっていくんだなということを感じることが多くあります。地域資料を守るという活動がどういうことに「つながる」のかという興味が湧きます。地域資料保全以外でも、友好という広い意味で、杉戸と富岡の関係は今後どのように展開するのか。あるいは、杉戸でも歴史資料の保全について何か展開できるのか。見通しがあれば、内と外から経験を持たれている吉岡さんに少しお話をいただけますか。

(吉岡) 自治体間の協力関係がどのような可能性を持つて広がっていくのか、という観点でお話しします。富岡町と杉戸町は、ちょうど震災が起こる六カ月前に友好都市協定を結びました。友好都市協定を結んだ六カ月後に震災に遭ったのです。そこから避難者を受け入れながら、交流を深めてきました。杉戸町から出向した先

で私はプロジェクトチームに入った訳です。杉戸町は今年、日光街道開宿四〇〇周年で盛り上がりを見せています。しかし、色々問題があります。あくまでも地域資料保存は、過去を知って未来に地域の姿をつなげていく意義があると思います。私自身、杉戸町にいます中で、杉戸宿四〇〇周年はイベント感が非常に強いと感じています。地域資料を生かして地域を盛り上げるわけではなくて、イベントありきの地域資料を活かした町の振興という形になっていまして、そこが杉戸町がうまく地域性や地域資料の保存ができていないところだと思います。これを、富岡町の取り組み、地域資料を保存している活動を知り理解しながら、改めて交流を深めることで、今後につながってほしいと思います。

(阿部) ありがとうございます。この問題は、私も最近すごく感じます。福島もそうですが、資料保全が必要といいながら、やはり観光が先に立って、まず観光で人を呼んで、そのために歴史資料を活用しようという発想なんです。そもそも地域資料が保全され、継承されなかったら意味がないと私は思います。しかし、どうもイベント感というか、人を呼んでお金を落としてもらうという発想が強い。そういうところが徳竹先生の「市民の歴史意識」という問題ともつながってくるのだと思います。地域の人間が自分たちの手で地域の文化を守ろうという、それ自体が「文化」にならないかと思うんです。

逆にいうと、杉戸のほうでも、今回の富岡の経験を何かの形で次につなげていくことができれば大変いいと思います。このプロジェクトチームに参加された経験を通じて、それが杉戸でも広がっていき、各地でつながっていけば大変いいことなのだと感じます。

その意味では、普及・広報という問題が非常に重要だということになります。富岡町でも、例えばマスメディア対応を含めて、色々な形で努力をされてきたと思います。自治体という一住民に近い立場で、住民と接しながら、どのように資料の所在情報などを集めていくか、あるいは、我々のような外の支援者とうつつながっていくか。そのためには、色々な情報の発信を含めて、「つなぐ」という意味での自治体の役割はますます大きくなっていると思います。その発信について、三瓶さんのほうから、近年の試みですとか、あるいは、今後どういう形で展開しようとかいうことで、何かお話いただければと思いますけれども、いかがでしょうか。

(三瓶) 今、吉岡君から、なかなか難しいお話がありました。私はこの三月まで、住宅支援係にいました。そこに吉岡君が来て、プロジェクトチームが立ち上がる前の公有文化財レスキューを手伝ってもらいました。課の仕事を超えて、ほかの仕事を手伝ってもらった状況でした。そこで、学生の皆さんにお話したいのは、これから公務員を志望される方もいると思いますが、ぜひ縦割りにならないで、横のつながりの目線を持ちながら仕事をしてほしいな、ということです。

発信と、内と外の支援者をどうつないでいくかというお話ですが、まず、我々プロジェクトチームが立ち上がった最初に行ったのは、町史編纂事業のときの資料所有者にアンケートをとって、今現在の資料の所在と管理の状況を調査しました。そこから情報を得たもの、ほかに町民の方から直接いただいたもの、さらに家屋解体の情報などを合わせて、蔵がある家や旧家などのレスキューに向かいました。そういった面で、福島大学の先生方とか、専門の知識を持つ方々のご支援が不可欠だと思います。レスキューを行うと様々な資料が出てき

ます。ご専門の先生方と資料の整理、地域資料の保全に向けて動いていきたいと思っています。

最後に発信について、手前みそなお話で申し訳ないですが、八月末に世界考古学会議で、歴史資料の保全の取り組みのお話をしました。海外の方々にも相通じるものなのだと思います。九月には韓国でも同じように、「世界アーカイブズ会議」で震災と原子力発電所の事故からの歴史資料の保存について報告しました。特に韓国の方々は、放射線の問題に非常にシビアだということを私自身も感じてきましたし、原子力発電所の事故があつて避難指示が出た区域から、どのように歴史資料保全をするか、地域資料を保存するかという、今までに例がない取り組みについて、色々なところで発信をしていく必要があると思っています。

(阿部) ありがとうございます。世界を見据えるような形も視野に入れつつ、富岡町の活動が広がりを見せているわけですが、先ほど菅家さんから、富岡が先を行っていることへの期待が述べられたと思います。これは私も常々言っておりまして、今日のリーフレットにも書いてありますが、双葉郡地域全体でもそうですし、福島県全体で展開していかなければならないと考える訳です。その中で、例えば震災アーカイブの動きなどもある一方で、こういう活動をやりたいと思っても、なかなか進まないというような、色々な問題、事情を抱えているところもあると思います。もし、そのあたりのことで、例えばうちの自治体ではこうなっているとか、あるいは先ほど徳竹先生が、住民の自らの意志で資料を調査するという浪江のお話を紹介されましたが、そういった事例の紹介などがあれば、ぜひお伺いできればと思います。どなたかいかがでしょうか。

フロア(泉田邦彦)

東北大学大学院の泉田邦彦と申します。私は双葉町の出身で、自分の家の資料の保全をやつて、先生方にもお手伝いいただいております。それとは別に、私の実家は双葉町両竹地区という沿岸部ですが、その北の浪江町請戸地区では今、大字の有志の方が津波で何もかもなくなってしまったから、せめて自分たちがどういふところに住んでいたのかをまとめておきたい、自分たちの地区の歴史を残したいとお話をいただきまして、私と東北大学助教の天野真志さん、国文学研究資料館准教授の西村慎太郎さん、姫路大学准教授の松下正和さんの四人で、請戸の歴史を調べて、簡単な本にしようという動きをしています。先ほども徳竹先生の話でありましたが、自分たちのコミュニティーがなくなるという状況に立たされて、やはり地域の住民の方から、自分たちがどういふところに住んでいたのか、自分たちがどういふ先祖たちのつながりの中で生きていたのか、そういつたものをちゃんと残したいという要望がかなり被災地のほうで、特に津波で何もかもなくなつてしまつたところで、住民の方からそういつた意識が生まれてきているのかなというのを感じております。

そういつた動きと、あとは一方では、やはり徳竹先生がおつしやつたように、私たちの歴史というのをどのように残していくのか、歴史に関心のない人たちにどう届けていくのかという部分ですすね。今日お話いただいた、門馬さんよりも奥の四人の方々ですね。学生さん、あとボランティアの方、あと専門ではないけれども関わつた。それと市民への発信をどうするかという部分なのかなと。確かに海外への発信とか、研究の発信もそうですが、いかに関係のない人に、市民の方に向けて発信していくのか。そのときに、大原さんがおつしやつたように、今、震災前の記憶を持たない人たちがどんどんこれから増えていくなかで、そういつた方たちに向けてどのように、例えば行政の方とか、あと大学の先生たちが関わつていけるのかなというのは、

ぜひ聞いてみたいと思つたのでお願いします。

(阿部) ありがとうございます。では、泉田さんの質問は、最後にお話をいただくとして、ほかにいかがでしょうか。

フロア(成田裕) 大熊町教育委員会で学芸員を務めている成田裕です。富岡町のレスキューの現状というのは、今まさに大熊町の現状そのものでして、我々教育委員会の方でもやつとこの間、レスキューをどうするかという話を具体的に話し始めたばかりです。

特に、当町の場合は、国道六号線から東側の部分に中間貯蔵処理施設があり、その有形無形、民俗の文化財をどのように保全していくかということが、まず喫緊の課題としてあります。特に埋蔵文化財は、環境省が除染して福島県教育庁が資料調査すると話がまとまっておりますが、それ以外の個人の文化財について、どのようにレスキューしていくか。既に民間について、環境省から解体してもよいという話もちらほらと教育委員会には入っており、そういうところを優先的にレスキューしなければならぬのではないかとこのところ、今、遅ればせながら動いているところであります。

自分が関わつてみて思うのは、富岡町のやつている支援の体制も含めて、かなり組織立つて役場の中で縦断的になさつているということで、その組織の在り方、そして、動かし方、あとバックアップ、福島大学も含めてということ、町役場だけにとどまらない支援の体制についてかなり驚いて、かつ、すごいなと思つている

ところです。

私、実は前職がいわき市教育委員会の「暮らしの伝承郷」の学芸員でして、五年前にまさにいわき市の蔵の中の調査をやっていました。くもの巣やほこりまみれになりながら、ヘッドライトをつけて、ずっと蔵の中を探しに行ったりしていたのですが、結局、いわき市のような大きい行政でも、やっているのは一博物館にとどまるところで、いわき市全体としてはやっていないんですね。その資料自体も、確かにいわき市の暮らしの伝承郷で時々展示はしていましたが、例えば学生さんのために何かするとかということとは当時はやっていなかった。それも含めて、資料の在り方、活用の仕方についても、富岡町のやり方というのは、非常に先進的だなと思っていたところです。今後、私どもの中でも色々問題点が出てくると思うので、富岡町さんの例を参考にしながら、大熊町もレスキューを頑張っていきたいなと思っています。

それで、また質問になってしまいうのですけれども、実際に文化財レスキューをする際、町民の方々とやりとりしたときに色々な問題が出てきたと思いますが、具体的な問題の例とか解決策について何かあればご説明いただければと考えております。よろしく願います。

(阿部) ありがとうございます。もし三瓶さんか門馬さんかいずれかで、今のご質問に対して答えられることがありましたらお願いいたします。

(門馬) 学芸員の門馬です。

最大の難敵は情報がないということですね。富岡町の場合、約四十年前に町史編纂の準備がなされ、発刊が三十年ほど前に終わっており、資料所蔵者は代替わりしていることが多いです。大原さんのように震災前から文化財保護審議員を務められた方々はご存じなのかもしれませんが、資料の所在が家の人ですらわからない。その状況で、全国に避難してきてさらに情報がない。普通、地域に行けば、蔵があるから、ピンポンと押して見せてくださいといえるはずだけれども、人が住んでいない。隣近所の人に聞こうと思っても、隣近所もないというのが最大の難敵です。そしてもうひとつが、「お宅で持っているはずなので情報をください」と言ったところで、「うちにはそんなものないよ」というケースが多いことです。さつき徳竹さんがおっしゃった通りです。そこで、町との信頼関係なのか職員との信頼関係なのかは微妙なところですが、どれだけ信頼していただけるかということです。震災のあと揺れや余震で傷んでいる家の中は、たぶんご家族はあまり見せたくないところだと思います。しかも、年数がたっているの、「土足で上がってください」と案内される。資料をレスキューするときに大事な家に土足で我々は上がるんです。そういった精神的なストレスをいかに超えられるか。それはどれだけ我々を信頼していただき信頼関係を築いて資料を探させていただけるかということです。これはとても難しく且つ重要なことだと思っています。

ほかに、二年前にレスキューを始めた頃は普通に入れた家も、震災から六年近くたつと、床を踏み抜いてしまったりします。実際、阿部先生、徳竹先生、小松先生に来ていただいた旧陣屋跡の家も、床面が激しく傷んでいて、中には勝手に落ちていた部屋もありました。そういった中でレスキューをするという、物理的にもかなり厳しい面もあります。

別の課題としては予算です。私も歴史PTはゼロ予算で始まりました。企画展を通じたり、あるいはメディアの方々と上手に付き合わせていただいて、やつと役場の中で少し存在を認めていただけるようになって、予算がつくようになりました。いかに予算をつけるか。先ほど大原さんが、心配してくださった通りです。予算がなければできないことがあるのは事実ですし、レスキューしたものを入れておく場所も必要。予算がないと中性紙封筒も買えない。それをいかにクリアするかというのは、やっぱりどれだけ住民の方々に理解をしていただけるか、議会に理解をしていただけるか。これは行政マンの腕の見せどころだとも思いますが、実際すごく心を砕いているところです。ほかにたくさんあるので、個別に聞いてもらえればと思います。以上です。

(阿部) ありがとうございます。今、門馬さんが話されたことは、私も普段、歴史資料保全活動をやっているに思っていることで、いつもぎりぎりのところでやっていることです。一番肝心かなと思うのは、自治体だからこそこできることがあつて、自治体の皆さんに頑張っていたからこそ我々も色々な支援ができる。我々も支援をしたいという気持ちは当然持っていますが、やらせてくれと急に押しかけるわけにもいかない。だから、自治体だからこそこできることを色々準備していただいて、そこでカバーできない部分というのを、外からの支援という形で、うまくつなげていくということが必要なのではないかなと感じております。我々は協力する意志は常には持っておりますので、遠慮なくご相談いただければと思います。あまり安請け合いはできませんけれども、努力できる範囲の中でやりたいと思っています。

最後に、今回は企画展というひとつの形ができましたが、今後いかにこの活動を展開させていくのかは考えていかなければいけません。先ほどギャラリートークで門馬さんが仰っていましたけれども、例えばこの協定を前提にすれば、色々な活動の内容が規定されておりますし、町のほうから大学に色々な期待をしたいこともあるようです。そのあたりを受けて、ぜひ徳竹先生や小松先生に、大学としてこれからどんなことができそうか、大学の社会的役割の中でどう展開していくのかというあたりについて、お話をいただければと思っております。もしかしたら、それが泉田さんの問いにも関わってくるのかなと思います。では、門馬さん、大学に今後どういうことを期待するかというお話をいただければと思います。

(門馬) ありがとうございます。期待することというのは、簡単にいうと「活用と教育」という二点です。まず活用ですが、先ほど大熊の方にお答えした通り、企画展などで活用して、町民の方々に見せていかないとやはり理解は得られませんし、何よりも我々にとっては、「こういったものを保全しているのだ」という情報提供につながらない訳です。「博物館に入っているようなものだけを集めているんじゃないよ」と。それももちろん対象ですが、保全対象を目で見せて知らせることが企画展においては非常に重要だと考えています。では、その企画展をやるためにはどうすればいいのか。レスキューが必要ですが、その次に整理をしていただかないと活用はできません。今回、一万二、〇〇〇点の中から三十点集められたのは、福島大学の教員と学生の皆さんのおかげです。これは本当に感謝しています。企画展などでの発信ができるからこそ理解も得られるし、「こういったものを集めているのだ」ということも周知できる、この繰り返しが必要だと思っていて、すごくタイトなスケジュールの中で無理やり企画展をやらせていただいています。その意味でもし可能であれ

ば、整理作業とレスキューをまだまだ協力いただけると非常にありがたいです。あと渡邊拓さんのように専門研究の材料としていただけると、やはりそれは地域の蓄積にもなりますので、本当にありがたいと思います。

次は教育の面ですが、P・Tのど素人だった吉岡を、我々が心強いなと思えるぐらいまで育ててくれたのというの、実は、町民の方であり学生の皆さんだと思っています。なぜかというと、素人の方でも、歴史が全然わからない方でも、専門でやっていた人と何回も何回も一緒に蔵に入ったり、あるいは封筒に入れる作業を共にすることで、「こういったことだったら自分もできるな」とか、「こういったポイントで作業を進めているのだ」ということを学習していくわけです。その意味では、福島大学の学生さんというのは、歴文P・Tの職員にとつては先生です。「資料つてこうやって扱えばいいんだ」、「資料つてこういうふうに撮影するんだ」と。それをP・Tのメンバーが二年以上学んだから、今はひとり立ちして任せられるような職員も出てきています。

そういった意味で大学は町と違って、県内全域どころか、もつと広く南東北を視野に入れられてると思いますので、ほかの地域に対しても、そういった教育ができるのだと思います。かなりタイトなスケジュールの中だとは思いますが、大学や史料ネットはそういったノウハウを一般化できる一番いい機関なのだと思うんです。その意味では、先ほどの大熊町さんの話でもありましたけれども、被災地に限らず、市民の方々にそういったノウハウを伝えること、「誰でもできるんだよ、ただ確かにちよつとしたノウハウは必要だからちよつと一緒によつてみようか」という啓蒙を大学側には期待します。そして、引き続き富岡町の資料保全もよろしくお願ひしたいと思います。

(阿部) どうもありがとうございます。活用と教育、あるいは私も含めて歴史学者としての意識の問題を含めて、色々大きな問題が突きつけられたと思います。真打ちのようにお待たせしてしまいましたが、徳竹先生、そのあたりでお考えをお聞かせいただければと思いますが、いかがでしょうか。

(徳竹) そうですね。活用という点では、先ほど午前中に門馬さんのほうから、展示の案内をしていただきましたが、非常によくて、ひとつの資料をいつの間にこんなに読み込むだろうというぐらい読み込んでいて、そこから出てくるわかることをちゃんと伝えられるというのはとてもすごいなというふうに思ったのですが、やはり町民ですね。その自治体で動いていくためには、その町民の理解を得ることが最も大切なことです。で、ちゃんとその成果をわかりやすく伝えるという活動を、これは必ずやらなければいけない。これは大がかりな学がやるべきなのかとか、自治体が必要だかとか、そういう役割分担の問題ではなくて、相互にうまく連携しながらやっていくことが必要だろうと思います。

それは、でも、先ほど私が出した話の中からすれば、阪神・淡路のあとでそういうことがしつかり意識をされていて、そういう活動は当初からやっていたんです。宮城の資料ネットのほうでもやはりレスキューした資料から歴史像をつくって、小さな冊子をちゃんとつくって公開するとか、そういう活動は各地でやっている。もちろん西村慎太郎さんとかもやっていますよね。ちゃんと先行する事例があるわけですので、そういうことに学びながら、どうやって町民に還元していくのかということを、この資料レスキューに関わっている人は常に考えなければいけないだろうと思っています。その手伝いができるとするならば、私も当然それはやってい

きたいと思っています。そういう保存をし、整理をし、活用するという好循環を回していくための工夫ですね、そこがやはりとても大切なのかなというふうに思っています。

(阿部) ありがとうございます。小松先生、何かコメントをいただけたらありがたいのですが、いかがでしょうか。小松先生は、先ほどご紹介がありましたけれども、リーフレットにも文章をお寄せいただいているので、ぜひお願いします。

(小松) 小松です。人間発達文化学類なので、徳竹先生、阿部先生とは違う学類にいますけれども、歴史学を担当しています。私は、大学教員の立場からお話をさせていただければと思います。今日、報告いただいた佐藤さんにしても、リーフレットに感想文を書いてくれた学生にしろ、みんな楽しかったとか、すごく興味深くてよかった、いい経験になったって言うてくれたのは非常によかったなと思います。活動を継続していくというのは、この活動はすごく大事な使命を帯びた活動なのですけれども、やっぱり学生は楽しくないと来ないですよ。楽しいと思ってくれるということは、やっぱり何よりだと思います。そして、また来ようと言っていて、誰かを誘ってまた来てくれれば、この活動は続いていくのだろうと思います。

資料を扱う楽しさとして、博物館にあるような資料に触れたという喜びがまずありますが、その次に読めたというのがあります。例えば、長い手紙だけではなくても、領収書の何を買ったのかという品目を読めただけでも、小さいですが喜びがあります。この活動の中では、例えば品目を読めて、こっちにも同じにも品目があ

るよ、などという話があると、なんでこんな品目をいっぱい買ってるんだろうねという話になったりとか、これは十二月だから正月用かねとか、また掛け軸が出てくると、この掛け軸は何に使うかねとかいうような話を、教員と学生がみんなでわいわいと話している。でも、これってまさに救出した地域資料に命を吹き込む作業なのではないかなと僕は思います。その資料からどんな面白いことが言えるんだろうか、そして、その先にはおそらく富岡らしさを抽出してくるというこのPTの活動の最終目的もつながってくるのかなと思いますし、大学としても、今、大学が求められているアクティブラーニングの、まさにそのものだろうと思うんですね。その点では、活用という点でも、今後、大学と町が協力できるような局面がもしあればいいなと思うことがあります。それは古文書を読めないとならないというかなりハードルが高いことなので、そう簡単ではないかもしれませんが、その上で学生には、そうやって色々話ができるその資料が、この活動がなければ失われていたかもしれない、この世からなくなっていたかもしれないというその恐怖というか、この活動の重要性というものを身にしみて理解してもらって、将来、公務員になったり教員になったりしたときに、こういうものを、単に「古いから大事なんだよ」というだけではなく、「本当に大事なんだ」ということを実感を込めて伝えられる、いわば徳竹先生が今日言われた歴史意識の伝道者になってほしいなと期待したいです。

(阿部) ありがとうございます。いいまとめの言葉をいただいた感じです。それでは、時間が迫ってまいりましたので、今日の講演の先生、それからご報告いただいた皆様から、最後に簡単に一言ずつ、今日のテーマである「なぜ地域資料を保全するのか」についてお願いします。

(大原) 今日のシンポジウムのテーマ、「なぜ地域資料を保全するのか」ということですが、これを通して私は、富岡町の復興・再生につなげるものでなければなりません。地元の復旧復興につなげるものでなければなりません。それで、そこにいて活躍できるのは若い方たちでなければならないと思っております。ですから、過去を知るだけでなく、未来に向けてこのプロジェクトが何を発信していくのかということを経営的に取り組んでいかなければならないと。この「つなぐ」ということは、すごく大事だと思うんです。ですから、それが具体的にどのようなしていくのかというところに期待したいと思っております。

(吉岡) 今回のシンポジウムを通して、過去から学ぶことがたくさんあるのだと実感させていただきました。過去から学んだことをもとに、将来どうしていくかということを選択することができ、導くことができるとするのは、やはり若者の使命なのかなというのはあらためて実感いたしました。

あと目標・目的に対して、今ある現状をよく考えて、何が問題なのか、どうしていくのかということを過去から学ぶことで将来につなげられれば、よりよい地域資料の保全にもつながるのかなと思いましたので、あらためてこの地域資料の保存の重要性というものを学ばせていただけたのかなと思います。

(菅家) 富岡町の再生と町の方々と共に将来を担う子どもたちのために役立とう、ささやかですがお手伝いをしていきたいと思っております。

(佐藤) これまで自分は六回ほど参加させていただきました。とあるときから、「毎回参加してすごいね」とか「偉いね」とか言われるようになりましたが、やっぱり先ほど小松先生がおっしゃっていたように、参加して楽しい、読めて楽しいという想いがあったて参加していました。だからこそ、「大学で頑張ってきたことは何ですか」という質問にも、堂々とやってきたことを話せたと思います。手伝いは微々たる力でしたが、これがこれからの富岡町の復興創生に役立ってくれたらな、と思いました。ありがとうございます。

(門馬) 我々富岡の学芸員はどこにでも行きますので、同じように資料レスキューをやりたい自治体の方、あるいは民家の方がいらつしやれば、我々は土日だろうが夜だろうが伺いますので、お声がけください。

(三瓶) 近隣の方々のところにも、資料レスキューを広げていければなと思っております。地域資料をなぜ保全するのかということで、やはり先ほどの報告の最後にも申し上げた通りですが、過去の生活のありようを示す資料とおして、過去の人々がどのような生活したのかを学ぶ。そして、を通して、地震・津波・原発事故をどのように乗り越えていくのかを記録する意味でも、地域資料というのが大事なのだと思っております。

課題としていただきましたが、それをどのように地域の人々へ還元していくかということ、やはり楽しくないと人は来ないということもありますので、今後そういった取り組みも大事なのだなということに気づかされ

たシンポジウムでした。ありがとうございます。

(徳竹) 今日とは色々な方からお話を聞くことができました。特にこの作業に関わって体験をしてくれた方から、学生も含めて、またボランティアの関係者も含めて、お話をいただいたのは、本当によかったなと思っています。大学側からすると、こういう機会を与えていただくこと、教育の機会として活用させていただいているという面は当然あるわけですが、それを快く入れていただいて、しかも、それが実際に役に立っているという、そういう循環が回っているというのは、大学と地域、あるいは役場との関係としては、非常にいいことなのだろうと思います。こういう関係がうまく回るというのは決して簡単なことではないと思うんですね。歴史というものを専門的に学びつつある学生が、その学んでいることが直接使えるというようなことが役場との間でうまく回っていくというのは、そんなに数あることではないと思っています。それができているのは、やはり富岡のほうでちゃんと受け入れ態勢をつくってくださっている職員の方々の努力のおかげだと思っています。しかも、それをそのことをちゃんと感じ取ってくれる学生がいるということが、今回良かったというか、そういうことが知れたというのが、私にとっては非常に大きいと、教員としてここに勤めていて教壇に立っているという意味では、そういうことを感じ取れている人がいるというのは、本当にうれしいことだなと思いました。それで、大原さんのご発言の中で、ちょっと前のほうの話になりますが、若い世代に伝えていくときに、物を通じてとか、映像みたいなものを見てとか、色々なことを通じて伝えていくわけですが、やっぱり直接話をするということの大切さですね。そのことをご指摘されたところがあつて、それは本当にその通りだろうなと

思うんです。本で読んで理解するということだけではなくて、直接自分が知っている人から聞くという体験はとても大きい。それは、伝承していくという意味では非常に大きなことなのだろうと思います。

今回の地域資料の保全に関わっていく場合は、保全活動にその地域住民の方が関わっていくことがとても大切だと思います。出てきた地域資料があつて、それを見た地域住民の方が、「これはこういう資料でね」とか、「こういうときに使っただよ」と言ってもらうことが、それを次世代に継承していく上では非常に大きな役割を果たすのだろうと思っています。

私は大学の教員としてここにいますので、授業等を通じて地域資料の大切さというものを伝えていくつもりです。学生みんなはたぶんわかったのではないかと思いますが、今日、私が出した資料というか、スライドに出した資料は、全部、「地域史Ⅰ」という授業でしゃべっている内容です。超絶ダイジェスト版です、十五回かけているのを十五分でしゃべるわけですから。そういうものを今回しゃべっているのですが、でも、そういうことを通じて、六十人とか七十人の学生に講義をして、何人がそれを受け取ってくれるかわかりませんが、少しずつ種をまいて、それがいつかどこかで花を開いてくれるのではないかとこのことを期待しているということです。

「なぜ地域資料を保全するのか」というのを今回のテーマとして挙げられていますけれども、できればこの問いが必要なくなるように、「なぜ」というよりは「どうやって」というテーマになるような社会をつくりたいと私は考えているということです。

(阿部) 締めの大変まとまったお話がありました。ありがとうございました。それでは、これにて今回のシンポジウムは終了させていただきます。長時間お付き合いいただきまして、皆様どうもありがとうございました。

(以上)

企画展とシンポジウムの 開催にあたって

阿部 浩一（福島大学行政政策学類教授）

二〇一一年三月の東日本大震災と福島第一原発事故によって長期にわたる避難生活を余儀なくされている被災地では、地域のあゆみと人々の営みを後世に語り継ぐ「地域資料」の保全が喫緊の課題となっています。

富岡町は二〇一四年に役場内の有志による歴史・文化等保存プロジェクトチームを立ち上げ、いち早く民間所有の地域資料の救出・保全活動に着手しました。福島大学は徳竹剛・小松賢司教員を代表にCOC事業「ふくしま未来学」の研究プロジェクト採択を得て、学生たちとともに、町に寄託・寄贈された地域資料の記録整理活動を支援しました。この取り組みが実を結び、二〇一五年八月に「富岡町と福島大学との歴史・文化等保全活動に関する協定書」が締結されました。

この協定では、富岡町の地域資料を後世に継承す

るため、所在確認調査、保全・整理作業、調査研究、発信などお互いに協力して活動することが定められています。今回の企画展およびシンポジウムは、協定締結一年を経て、富岡町と福島大学の調査・整理活動の経緯と成果を広く発信するためのものです。

大学の社会貢献・地域連携がこれまで以上に強く求められる昨今の情勢にあつて、地域資料の保全と継承・活用を軸とする富岡町と福島大学の取り組みは、新たな可能性を切り開くものといえましょう。さらにいえば、このような地域資料を護る活動は双葉郡域、福島県内全域でも同様に進められなければならないものです。

わたしたちの取り組みはそのささやかな一歩にすぎませんが、会場にて展示をご覧いただき、今後の活動のためにも率直なご意見・ご感想などを賜ることができましたら幸いです。

企画展「ふるさとを 想う まもる つなぐ」展示解説

企画展「ふるさとを 想う まもる つなぐ」地域の大学

と町役場の試み」

富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム 学芸員 門馬 健

【展示】

シンポジウム「なぜ地域資料を保全するのか」は、富岡町と福島大学の協力による地域資料保全活動の経緯と二年間の歩み、途中成果の発表の場として計画した企画展「ふるさとを 想う まもる つなぐ」地域の大学と町役場の試み」への理解を助けるために開催しました。「地域資料」とは、「地域についての情報が付与されている資料」を指す言葉として富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチームが使用しているものです。

企画展では、富岡町で地域資料保全活動を行った六つの家の史料を家ごとに紹介しました。いずれも江戸時代からの歴史を持ちますが、当然ながら各家の成り立ちは様々です。すなわち、それぞれの家を持つ性格・側面は様々で、バラエティ豊かな「富岡の顔」を垣間見せてくれる史料たちです。

ここでは、企画展で展示した史料を有する各家の概要を説明するとともに、「なぜ地域資料を保全するのか」とい

うシンポジウムのテーマを理解する一助となることを期待しながら、展示解説の一部を紹介いたします。地域資料が語る富岡地域の様々な表情を楽しんでいただければ幸いです。

大原弘道家資料群

大原本店は、旧富岡宿の西の入口に位置し、中央商店街の顔とも言える商家です。

主な成り立ちとして、宝暦元年（一七五二）に醤油と味噌の醸造業を興し、近代に入って呉服商や軽工業への出資など事業の幅を広げました。

資料レスキューでは、近代の帳簿が大量に確認できました。帳簿の種類は味噌・醤油の醸造関係、呉服商関係のほか、これまであまり実態が伝わってこなかった「富岡羽二重株式会社」の経営史料など多岐にわたります。「富岡羽二重株式会社」は、大原久平治が明治四十一年（一九〇八）に設立しました。

このほか、幕末期やアジア太平洋戦争中・戦後の日記史料なども確認され、それぞれの時代の富岡地域の人々の生活実態や考え方に触れることができそうです。

『富岡町史』ではあまり言及していませんが、近代の富岡地域の経済力・生産力を探る上で、大原弘道家史料はたくさんの方の情報を伝えてくれるはずで、今後の分析が楽しみです。

大原弘道家史料のうち、企画展では八点を紹介しました。



大原弘道家資料群

【史料①】「原品買入帳・麴製造帳・醤油製造帳・醤油売揚帳」(明治三十二年)

宝暦元年の創業以来、大原家が続けてきた醸造に関する帳簿です。

今では消えてしまった「小浜字駅」という住所も見られます。

この史料を作成した久平治は実業家として活躍、家業の幅を広げ、大原本店の経営拡大に成功しました。

【史料②】「掛売口座元簿」(明治四十四年)

久平治が始めた呉服商いに関する大福帳です。

原材料の仕入れ価格や取引先の情報、商品の納入価格などが記されています。

とても厚手ですが、同じような大福帳が数多く確認されています。

【史料③】「富岡羽二重株式会社 財務諸表」(明治四十一年～大正三年)

六年分の財産目録、貸借対照表、損益計算書、営業報告書の綴りです。

『富岡町史』では、工場の写真を掲載し、操業していたことは記していますが、実態についてはあまり伝わっておりませんでした。

しかし、今回の史料保全活動で経営関係史料が多数見つかったことで、「富岡羽二重株式会社」の経営規模や商圏などが分かります。

保全史料群の中からは、このほかの年代のものも確認され、さらなる研究により富岡地域の近代の経済状況がより明らかに becoming そうです。

【史料④】「富岡羽二重株式会社 決算下調書」(大正十一年)

営業報告書を含んだ決算の記録です。【史料③】の財務諸表を作成する前段階の資料だと考えられます。

景況、原料相場のほか取引規模や取引範囲などが分かる史料です。外部に示さないことを前提に作成されているため、数々のメモ書きに作成者の「ホンネ」を含めた重要な情報が詰まっています。

【資料⑤】「年中記」(嘉永七年)

嘉永七年の日記です。大原弘道家史料群で近世の日記はこれが唯一です。

天気、風向きは毎日記されているほか、取引先の情報などが詳細に記されています。取引先は「山加」「山二」「嶋屋」など屋号で呼んでいたことが分かります。また、廻船の積み荷の情報、波の高さなど商売に密接に関わる情報が見られます。

【史料⑥】「日記」(昭和二十年)

終戦の年の十二月に書かれた日記です。日記を記した人物の思想や読書量が分かるほど、詳細かつ率直に物事を記しています。

戦争は「いまいましき」ものだという認識が表れていますが、これは「前から言えた」のか、「やっと言えた」のか、興味があるところです。

商家や名主の家は代々筆まめになる傾向があります。普段から帳簿や御用留などを記していたり、手紙のやりとりが多かったりするためだと思います。

大原弘道家資料群には、このほかアジア・太平洋戦争中の「温泉日記」なども残っており、地域の様子が分かる貴重な資料群です。

【史料⑦】「夜の森行軍写真」(昭和十三年)

現在の桜通りの写真です。他の道路と比べ、道幅が広がったことが分かります。また、現在は古く太い桜の木も、まだ若い様子がわかります。

【史料⑧】「大塚本店写真」（昭和十年）

立て替え前のお店を撮影した写真で、とても賑わっている様子が伝わります。

写真は、非常にたくさんさんの情報量を含んだ資料です。文字では伝えにくい情景や様子を画像で伝えてくれます。

大塚弘道家資料群に限らず、資料保全の際に写真は必ず残すようにしています。

大塚博巳家史料群

大塚家のルーツは越後国小千谷にあり、幕末維新期に富岡地域に入ったとされているそうです。長岡藩士太田家、横田家と縁が深く、越後方面からいわき方面に太田・横田両氏の子弟子女が移り住んだそうですが、戊辰戦争と無関係ではないようです。そのうちの一人が旧小浜村の百姓・大塚家に養子として入り、以後現在まで続くといわれています。

大塚家には、明治四十四年（一九一）と昭和四十二年（一九六七）に記された由緒書があります。以前、ご当主にお話を伺った際、この由緒書について熱心に話されました。なぜ富岡地域に自分がいるのか、由緒書を見る度に思いを馳せたそうです。自分の家がどのように続いてきたのか、家のアイデンティティについての興味関心が深いのだと思います。

【史料①】「覚」（安政五年）

安政五年の往来手形です。このころの富岡地域では、講を結んでいたようです。発行者は棚倉藩で、小浜村の百姓治兵衛が伊勢神宮や讃岐の金比羅社に参詣するため、発給を受けたことが分かります。

往来手形は、安全に旅を行うための身分証明の役割を果たしていました。宿での宿泊まりや旅先で病気になった際の手当て、旅先で死亡した際でも家族のもとに連絡が届くような仕組みが作られていました。

【史料②】「先祖の系統覚書き大要」（昭和四十二年）

昭和に入り、大塚家の由緒を改めて記した由緒書です。関係する七家の概略が記されています。

なぜ自分が富岡に生まれ、現在に至っているのか。家の来歴を知らせています。親子関係などの系譜が分かるだけの系図を作るのではなく、詳細な経緯や補足情報などを加えた由緒書を書いているところに、作成者の意図が感じられます。

一般論として、家の来歴や成り立ち、地域の歴史について語り継ぐことが困難になりつつあります。そのようななかで、知識・記憶のある人が何かの契機や心境の変化などをきっかけに作成した本史料のような史料は地域にとって大変貴重なものです。

そして大塚家史料群には、安政五年の往来手形も含まれていました。これは、『富岡町史』編纂時に使用したものです。現在、町史編纂時に使用した史料の多くの所在が分からなくなっています。四十年近くを経て保全できた貴重な例だと思えます。井伊直弼が政治を行っていたころ、富岡の百姓が伊勢・金比羅参りを楽しんでいたのかもしれませんが。



大塚博巳家史料群

【史料③】「大塚家由緒書」（明治四十四年、前後欠）

明治末年に編まれた由緒書です。残念ながら前後が欠本となっています。【史料②】とおおよそ近似した内容を記していることから、【史料②】の種本だと考えられます。戊辰戦争前後の家の経緯などが記されています。

明治と昭和に書かれた二種類の由緒書ですが、それぞれの作成者は何を思っていたのか。興味は尽きません。

このほか、今回は紹介できませんでしたが、当主が大塚家にとって重要だと認識して綴ったファイルには、長岡・小千谷からの由来のほか、寺社への寄進に関する史料などが収められています。

佐藤一光家史料群

佐藤一光家史料群には、これまで知られていなかった宝永三年（一七〇六）の下手岡村検地帳（「陸奥国檜葉郡下手岡村本田畑水帳」）が含まれていました。富岡町内で確認できている二件目の検地帳です。

佐藤家は下手岡村の名主を務めた家でした。町史で使った由緒書・系図を見ると、由緒は富岡隆時の富岡入りまで遡るとされます。富岡町のなかでも古い家のひとつです。由緒書は複数見つかっており、くり返し佐藤家の由緒を

領主に主張していることが分かります。当時の人々の心性と地域の権力構造・経済構造が見えてきそうな史料です。

佐藤一光家史料群は、三十年以上前、諏訪神社に預けられたそうです。史料所在調査で町の学芸員が佐藤さんに連絡したところ、若い頃に史料を引き継いだものの、自分では価値が分からず、古い物なので諏訪神社に預けたとのこ



佐藤一光家史料群

とでした。諏訪神社は一度史料保全作業を行いました、その際に触れなかつた社務所を含め、再度の徹底調査を依頼したところ、快く応じてくださり、保全にいたしました。これから史料整理を通じて、史料群の全体像を明らかにしつつ、富岡の近世村落の様子が明らかになることを期待します。

【史料①】「陸奥国檜葉郡下手岡村本田畑水帳」（宝永三年）
下手岡村は、宝永二年（一七〇五）に手岡村が上手岡村と下手岡に分かれたことで生まれました。佐藤家は下手岡の名主を務めた家です。

水帳とは検地帳のことです。検地帳には村高が記され、年貢賦課の根拠となりました。この検地帳（水帳）は、分村翌年に作成されたもので、分村後の村高を確定させる意味を持つと考えられます。この水帳から、分村後に確定された下手岡村の村高が約四〇〇石だったことが分かります。

江戸時代の村の様子を知る上で重要な基礎史料です。

【史料②】「佐藤家系図」（近世、後欠）

この系図によると、佐藤家の由緒は、永正元年（一五〇四）の富岡隆時の日向着城まで遡るとされます。系図の後半が欠落していますが、佐藤家史料は未整理であり、今後追加

で保全する予定もあるため、残部が見つかるかもしれません。

【史料③】「奉願口上書」（享保六年）

百姓治兵衛が作成した文書で、自分の家の由緒について書かれています。祖父の代に帯刀を認められたこと、それが誤って一代限りとなっていたこと、一町五反歩のほかに新たに開墾した農地があること、岩城大和守以来の由緒であること、代官土田市郎兵衛から開発分の拝領を認められていることなどを主張し、相馬城下を通行する際には帯刀を許すよう訴えています。

治兵衛は十二年後の享保十八年にも同様の文書を、「富岡組御代官」に差し出しましたが、享保十八年の史料では「佐藤」姓を名乗っています。帯刀と共に名字を名乗り得る家柄と主張しています。享保六年には自らを百姓としていましたが、十二年後には名字を名乗り、新切分の農地の所有を訴えていることから、古い由緒を根拠に家格の維持・上昇を図っていることがうかがえます。

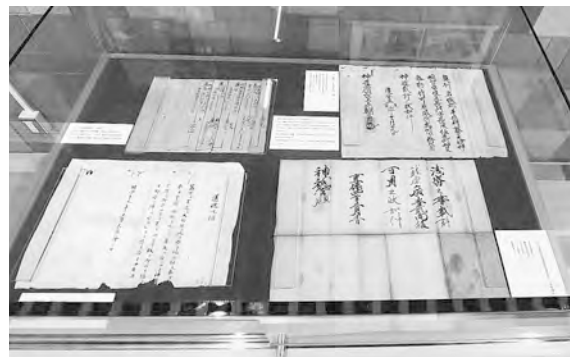
宇佐神幸一家（諏訪神社）資料群

「昔から地域にある」と意識的・無意識的に捉えている「場所」として神社や寺院が思い浮かびます。富岡地域で古くから親しまれてきた諏訪神社には、神社にしかない貴重な史料がたくさんあります。

今回紹介している史料は、初めて目にされた方が大半だと思います。裁許状は、近世の神社統制、書札札など古文書学の勉強にもなりますが、地域の神社がどのような制度に則って存在し、現在まで続いてきたのか、ということを知り一端になるかもしれません。また、日清戦争に富岡からも出征し、戦死者を出していたことが分かる史料も確認できます。他家の史料と合わせて調べることで、戦争と地域について何らかの論点が出せるのではないのでしょうか。

一方で、双葉郡内の方は一度は見たことがあるかもしれないのが、版木から起こした各神社のお札です。諏訪神社からは、王塚神社、麓山神社の版木も出てきました。このほか、王塚神社の社殿造営関係の史料や寄進関係史料なども確認されました。

地域で支え合ってきた神社経営についても考察できそうです。



宇佐神幸一家（諏訪神社）資料群

【史料①】「神道裁許状」（慶安三年）

神職の代替わりの際に、神祇管領長上（じんぎかんれいちようじょう）の吉田家から発給されたもので、宇佐見長次が風折烏帽子（かざおりえぼし）と狩衣（かりぎぬ）を着用して神事を行うことを許可された文書です。

縦紙を用い、発給者の花押と印が押されており、礼の厚

富岡からも日中戦争での戦死者があり、神社が鎮魂の式典を担ったことが分かります。他の家の史料とともに調べること、活用の幅が広がりそうです。

石山功家資料群

石山家は幕末維新期に上手岡地区に移り住みました。戊辰戦争時は棚倉藩士でしたが、慶安二年（一八六六）の阿部家転封以前は白河藩士で「鉄砲組」に列された家柄です。棚倉藩は維新期に上手岡鉄山の開発・操業のため、上手岡に少なからず藩士を送り込みました。佐一郎と父・斎兵衛はその一員でした。

上手岡に定住した佐一郎は明治十三年（一八八〇）同村戸長に就任、同二十二年には上岡村長となり、川内村への街道改修など地域経営に尽力しました。

石山家資料群には白河藩時代を含め、幕末期の風聞書や別の藩士が記した日記、藩士の禄高の書上などの史料が含まれます。近代史料としては、白河に戻った斎兵衛との往復書簡など白河とのやりとりの手紙類がとて多く、生まれ故郷との親交が続いていたことが分かります。

富岡町域は平藩領や幕府領だったイメージが強いようですが、富岡町の成り立ちには棚倉藩士の存在も大きな影響を与えたのです。

い文書様式を採っています。【史料②】にも言えますが、江戸時代の地域の神社が、どのような仕組みで統制されていたのかを知る上で貴重な史料です。

【史料②】「享保四年浅査着用裁許状」（享保四年）

宇佐見廣安が神事の際に浅査（あさくつ）の使用を許された文書です。神事の際の装束も、中央の許可を受けないと着用できなかったことが分かります。

【史料①】同様、宮司の代替わりごとに出されました。【史料①】に比べると薄紙な文書様式で、折紙を使い、発給者の花押は略されています。

このときはまだ「宇佐見」を名乗っていますが、後に「宇佐神」に変わります。なぜ変わったのか、調べてみたいテーマです。

【史料③】「宇佐見氏系図」（近世）

江戸時代の諏訪神社の歴代神職の一部を記した系図です。今回紹介した裁許状に出てくる長次、廣安の名前が見えます。

【史料④】「送魂祝詞」（明治二十九年）

日中戦争での戦死者を弔う祝詞です。



石山功家資料群

【史料①】「上手岡村戸長任命書」（明治十三年）

石山佐一郎は、上手岡村戸長を始め議員など榊原郡内の要職を歴任しました。また、後の産業の発展につながる川内への道路修繕事業などを積極的に進めました。

【史料②】「石山家由緒書」（近代カ）

石山佐一郎が作成した由緒書です。「石山家文書」のなかには、この由緒書を作成するために佐一郎が記したとみられる沢山のメモがあります。メモの年代から、由緒書の作成は明治に入ってからだと推測されます。

佐一郎は富岡に移住しましたが、父斎兵衛はほどなくして白河に戻ったようです。青年期まで白河で暮らし、転封で棚倉藩士となり、棚倉領の鉄山開発で富岡に定住。佐一郎は何を思っただろうと推測されています。論点は尽きません。

【史料③】「日記」（文久二年）

阿部家が白河藩を治めていた時期の日記で、別の白河藩士の筆とみられます。京都の政情などのほか、藩主の帰国に伴う藩士の移動についてなど幅広い情報が記されています。

【史料④】「手控」（慶応二年）

棚倉藩が支配する村々の書上です。この年、阿部家は白河から棚倉に転封となりました。下郡山村、仏浜村、小浜村、本町村、上手岡村、新田村など現在も富岡に残る地名が書かれています。町民の方には親しみを感ずる方もいらっしゃると思います。

【史料⑤】「封筒（石山斎兵衛殿宛）」（近代）

父斎兵衛に宛てた佐一郎からの書状の封筒です。佐一郎は上手岡村に留まったものの、父斎兵衛は、かつて住んでいた白河に戻ったことが分かります。

このほか、数多くの書簡が確認されており、今後の調査が期待されます。

関根義弘家史料群

学生たちが目を潤ませながら整理した史料群が関根家史料です。

当初、町の学芸員は、関根家史料は和算関係が大半だと想定しておりました。

幕末から明治を生きた関根熊吉は、多数の門下生を育てた優れた和算家でした。熊吉は、幕末に三春藩校で算学を指導し、近代に船引で私塾を開いた佐久間庸軒のもとで最上流算術を学び、富岡地域に広めました——という史料がほとんどだろうと考えていたわけです。

しかし史料整理では、算学関係に加え、アジア・太平洋戦争時の軍事郵便が二十通ほど確認されました。郵便は、日中戦争で中国に出征した夫が妻と母に送った手紙でした。家族への愛情、寂しさを押し殺すような表現、子ども

たちへの期待——複雑な心情が読み取られます。

そして出征した夫は戦死しました。残された妻は、手紙をずっと大切にしまっていたのでしよう。

史料の目録を作成するためには、史料の内容を読まないといけません。学生たちは、手紙の文字を負いながら、目を腫らしていたのです。



関根義弘家史料群

パンフレットで小松先生が本史料に触れています。パンフレットを読んだ上で、今回紹介している史料の文字を追って頂きたいと思っています。

【史料①】「算学教本」（幕末・近代）

いずれも関根熊吉が使用したとされる和算教本です。熊吉の門人は三〇〇人を超えたとされています。

熊吉や学友らは、学力向上を願って赤坂神社（小良ヶ浜）や檜葉天神社（檜葉町）に算額を奉納しました。算額奉納は広く全国的に見られるものです。

富岡町小良ヶ浜の赤坂神社には、熊吉たちが奉納した算学がありました。昭和三十八年（一九八三）、孫の関根千尋さんが算額を復元し、改めて奉納したものが残っています。

【史料④】「関根千代宛 関根信義書簡」（七月二十三日）

（略）今日、貴女に出したあとに届きました。うれしきまゝ、早速開いて拝見いたし、馬を買った委細や美智が随分達者になった事等承はりまして、一人うれしくペンを走らせて居る次第です。美智子も何かと色々たしになって来た事は、貴女も何程か手か省ける事で御坐います。さぞ大きく変わった事と思ひは一日も早く凱旋してよろこばして上げ度いと存じます。小さい時から賢いやつでしたから今

でもやっぱり茶目を飛ばして家の笑ひの中心となつてゐる事と存じます。何卒より一しつけをお願い致します。千里や千尋も日に増して大きくなつて来た事でせう。千尋等は帰つて行つても全然僕の顔等は判らない事で御座るませう(略)

最愛の妻 千代様

幸福なるバ、より

【史料⑤―一】「関根千代宛 関根信義書簡」

(昭和十三年八月三日)

マ、ちゃん

貴女は今僕が書くこうとする事をどんなに待つてゐる事でせう。それを思ふとうれしくてうれしくて一時も早くこの手紙が貴女の御手許に届く様にとかきはしました。(略)

【史料⑤―二】「母宛 関根信義書簡」(昭和十三年八月三日)

【史料⑤―一】と【史料⑤―二】は一枚の封筒で出された手紙です。

母宛ての書簡(【史料⑤―二】)には「(略)歩兵伍長に任官致しましたから何卒御安神下さい。これも常日頃母上様が神仏にお祈り下さいましたその賜と存じ(略)」と、頼もしい息子としての顔、母を案ずる顔が覗かれます。一方、妻宛の書簡(【史料⑤―一】)では、別の一面が伺えます。

妻との手紙のやりとりこそ、本音を吐露できる憩いの時間だったのかもしれない。

【史料⑥】「関根千代宛 関根信義書簡」(七月十九日)

(略) 来るお手紙毎に子供達は丈夫だ、皆変りなく働いてゐると書いてあり乍ら、やっぱり最愛の妻や子程案じられるものは御座いませぬ(略) 然しこれも皇国の為です。泣き言を語る様な妻でない事を信じて居りますから、銃後の護りは決して心配いたしません、只暮々も軀にのみ気をつける様に練りかへしお願いいたします。また持病の胃がいたみませんかと色々と案じてゐます。(略)

【史料④】と【史料⑥】は、いずれも日中戦争の出征先の中国から富岡の家族のもとに届いた手紙です。妻と子を案じる様子、母に心配をかけまいとする様子がありありと感じられます。

現在を生きるアジア・太平洋戦争を知らない世代にとつて、「戦争」というと実感が伴わないテーマになりがちです。しかし、関根信義さんの書簡は、戦地で家族を想う人間の生の感覚を伝えてくれています。

信義さんは日中戦争後、一端帰郷しアジア・太平洋戦争で戦死されましたが、二十通あまりの手紙は、妻の千代さんが大切に保管していたものと思われれます。

戦争と地域、戦時下の人々の想い―この手紙たちは、戦争が地域とは無関係でないことを訴えかけています。



会場風景

地域資料保全活動参加者の声

渡邊 拓（福島大学行政政策学類四年 徳竹ゼミ）

昨年の二月から活動に参加してきましたが、扱った史料は、博物館に展示してあるようなものから、所持していた人の、人となりや生活の様子などが分かるようなものもあり、とても興味深かったです。富岡町の歴史の深さというものを再確認させられたように感じました。また、実物の歴史資料に触れることができる貴重な場でもあるため、今まで学んできた史料の扱い方や史料の読解方法を生かす良い機会にもなっています。

鈴木 康平（福島大学行政政策学類卒業生 阿部ゼミ）

初めて富岡町の歴史資料保全活動に関わらせて頂いたのは、文化史ゼミに進学した大学三年生の時です。大学で学んできた歴史や古文書整理に関する知識と経験を実際の活動の中で生かしたことは、大きな自信になりました。また、微力ではありますが、富岡町の方々が受け継いできた地域の歴史を将来へと繋いでいくお手伝いができたことを嬉しく思います。

私にとって、この活動に参加できたことは、何物にも代えがたい学生時代の貴重な経験です。今後も機会があれば関わりつつけていきたいと思っています。

渡邊 歩（福島大学人間発達文化学類四年 小松ゼミ）

実物の史料に触れることができるので、史料の読解や扱い方を生かすいい機会となりました。文書だけでなく、まだ小銭が入っている財布や、お土産とみられるポストカードなど、幅広い資料を取り扱うため、貴重な経験をさせていただきました。中には当時の人々のリアルなやりとりが見える史料もありました。当時の生活や人々の思いがより身近に感じられるような資料が多かったため非常に興味深かったです。

小松 賢司（福島大学人間発達文化学類准教授）

昨年四月に福島大学に赴任して以来、地域資料の記録整理作業に数回参加させていただいた。対象となる地域資料は実に多様、さらに言えば雑多であるが、それゆえにこそ、人びとの営みをダイレクトに伝えてくれる。ある回の作業では、出征した父から家族へと宛てられた軍事郵便が出てきた。父の家族に対する愛情、会いたいと願う気持ちがひしひしと伝わってくる。だがここに、亡くなった方の無念さと、残された家族の悲しみが、数十年を経てよみがえった。この資料が残っていないれば、この思いは永遠に忘れ去られてしまっただろう。

地域資料の保全とは、過去に生きた人びとの思いを、未来へ確実に伝えていくための作業である。特に地域が未曾有の危機に直面している富岡町にとって、それは重要かつ喫緊の課題であり、歴史関係の教員として、今後でもできる限りの協力を行っていきたい。そして活動に協力してくれる学生たちには、過去から受け継いだ地域に生きる現代の我々が、果たすべき責務について、活動を通じて考えてくれることを期待する。

末永 恵（富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム）

文化財等の知識が全くない中、活動に参加させてもらいました。実際に資料に触れ、読み方や扱い方を教わりながらの作業は大変貴重な経験でした。保全した資料には人々の生活の歩みが見え、町の歴史のひとつとなっていることを実感する場でした。

吉田 豊（富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム）

地域資料の保全に向けた取り組みをとおして、古里はそこにあるものではなく、護らなければならないものだと思付かされました。その一助となる活動にプロジェクトチームの一員として関わることができていることを光栄に思います。

富岡町からのメッセージ

富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム（歴文PT）は、富岡町内の地域資料と震災遺産の保全を進めています。

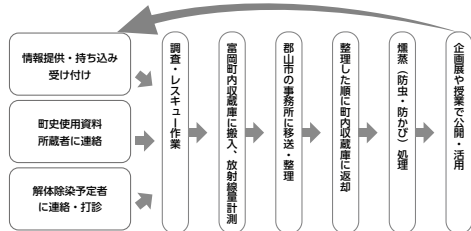
地域資料とは、「地域の営み・歩みが分かる情報が記されている全ての資料」を指します。具体的には古文書、写真、日記、ノート、民具などで、時代は中近世から平成まで文献・民具資料が存在するほとんどの期間を対象にしています。

広い時代、様々なモノを対象としているのには理由があります。

富岡町は、原子力発電所事故の影響で全町民が全国各地に避難し、5年半以上も町内での生活ができておりません。そのため、富岡地域の文化、習俗、行事、記憶の継承が困難となり、かつての「地域性」が失われかねない状況にあります。

現在の私たちの生活は、先人の経験・知恵・努力の上に成り立っています。富岡地域に限らず、全ての地域は、先人の営みによって独自の顔、特徴を形作ってきました。その独自性を後世に伝え、「富岡らしさ」を継承していくことこそ、未曾有の複合災害を「心」の面で乗り越えるために必要なことです。そして、富岡の歩みを物語る資料は、地域にとってかけがえのない財産です。今回、紹介している地域資料は、色々な富岡の顔を垣間見せています。紹介している資料から「富岡」を感じていただければ幸いです。

資料保全の流れ



富岡町は、地域資料保全のため、町民への情報提供の呼びかけや持ち込み資料の受け付けのほか、町史編纂事業で使用し持ち主に返却した資料の所在・保管状況の調査など行っています。また、家屋解体の予定者に資料保全の協力をお願いしています。

町は、集まった情報をもとに、所有者と日程を調整して家や蔵、物置などを調査し、日常生活で使用されていた道具や地域の写真、古文書など様々なモノを保全します。

どのような資料が何点あるのか、の確認は、整理作業で行います。福島大学の学生さんが協力していただき、目録作成や資料の写真撮影を行い、資料の所有者に渡す資料リストを作ります。

企画展では、保全した資料から見える「地域の姿」を紹介します。昭和・平成を含め、富岡のこれまでの歩みを将来に伝えるためにも、幅広い地域、色々な時代の資料が必要です。

「阿部 浩一 齊藤 紀明」

（福島大学教授・ふくしま歴史資料保存ネットワーク代表）
（富岡町副町長・富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム主任）

（司会）富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム 学芸員 門馬 健

司会・門馬

富岡町の震災後の新しい試みで始まった「歴史・文化等保存プロジェクトチーム」（以下、「歴史PT」）は、平成二十八年六月で発足から丸二年が経過し、三年目の活動に入っています。それと同時に、福島大学との連携開始からまもなく二年、同八月で協定締結から一年を迎えました。

今回は歴史PT主任の齊藤紀明副町長と、ふくしま歴史資料保存ネットワーク（以下、「ふくしま史料ネットワーク」）の代表で福島大教授の阿部浩一先生のお二方に、「地域資料の保全」をテーマに行政が取り組む意義や地域の大学と行政との連携効果などについて議論を交わしていただきます。

——副町長が振り返る歴史PTの二年間と、PT活動展開における政策面の意義、町民の反応は？

齊藤

今ほどありましたように、ちょうど二年経ちます。二年前というのはまだまだ震災後の混乱というか、まだまだ皆さん、とてつもない不安の中で、どう進んでいくかという状況でした。そしてその頃、復旧・復興という、どうしても目の前の黙っていても舞い込んでくる仕事をどんどん処理することが実情でしたが、そうした中で、この事業は、二年前の時点で「今この時点でやらなければならないんだ」という職員の発案で立ち上がりました。六月の年度途中ですから、予算も何もない中で始まりました。

私が最初に思ったのは、震災遺構の保存や歴史的価値のある資料の保存も当然そうなのですが、もしやるのであれば、町民の皆さんの心の復興とか全国各地に避難している人々の皆さんのつながり・きずな、そういった復興に役立てること。資料の保存だけではなく、文化の継承だけではなく、「復興に役立てる」という意味合いをぜひ強めていきたいなと思って、私もじゃあ一緒にやろうと始めました。

二年間たって、まさに、当時でないとできなかったというのが、数にも表れています。地域資料というと歴史的資料、旧商家でありますとか、普通の皆さんの家庭に入って、資料を集めて、大体二二〇〇点ほどに上ります。震災遺産は、富岡駅の看板とか、二時四十六分で止まった時計とか、津波が来た時に止まった時計とか、いろいろありますが五、〇〇〇点ほど集まりました。ここまで集めて、保存しているのは多分、双葉郡でも、富岡町が間違いなく一番であり、私は職員を誇りに思っていますし、町として非常に誇るべきことだと

思います。

そしてこれをいかに活用・展開していくかというのが大きな鍵になります。町民の皆さんも企画展などを開くと、地域資料から富岡の昔の風景とかを懐かしむ。震災遺産っていうのは、これだけの未曾有の災害を、教訓を後世に伝えていく点で重要ですけども、地域資料を通じて昔の営みを振り返ることで、皆さんがホッとしている感じがあるんですね。私は実はそこがこの事業を、今だからこそやる意義を感じています。学術的に何か歴史をつなげる、勉強する、確認するという以外に、そういったことを通じて皆さんが何か富岡に対して思いを馳せてもらう。「やっぱり懐かしい」。それが一番でして、この間もいわきの明星大学で初めて富岡町主催の企画展をりましたが、町民の皆さんのホッとした声とか、いろんな肯定的な感想をいただきましたので、まさにこれをもっともつと広げてやっていきたいなと思っています。

——阿部先生に。自治体が地域資料保全に取り組む意味とは？

阿部

福島県内では、これまでも自治体や博物館・資料館などが所在調査をしてきました。しかし、全県的にみてみると、調査・保全活動は進んでいないと言えます。例えば、『福島県史』を例にとっても、五十年近く前に作成されたものが今なお更新されずにいます。県内の古文書所在調査も一九八〇年代に悉皆的に行われてから、その後は進んでおりません。当然のことながら世代は交替し、これまで継承されていた歴史資料が失われてい

く危険性があるわけです。

そういう現状のもとで、例えば大学の研究者や博物館・資料館の方たち、地元の歴史に関心を持っている市民有志など、いろんな人たちによつて歴史資料保全活動は続けられてきたわけですが、組織的に、悉皆的にやるうとするとは非常に難しい。自治体が積極的に主導してやるというのが本来望ましいかたちだと思います。

ただ、自治体の文化財担当者の皆さんはいろんな仕事を抱えていて、地域資料の所在確認や保全などを進めるはなかなか難しいのが実情です。

その中で今回、富岡町は、東日本大震災と福島第一原発事故による被災という不幸な現実がきっかけではありますが、町の職員の方たちが歴史あるいは文化財を専門にしている・していないにかかわらず、有志で立ち上がって、町全体として資料を保全しようというプロジェクトチームを立ち上げた意義は大変大きいものがあって、福島県内でも先駆的なものといえます。これは被災している・していないにかかわらず、どこの自治体でもぜひ参考にし、刺激を受けて、同じような活動に取り組んでいただきたいという思いです。富岡町の皆さんにはぜひ先駆者として頑張っていたいだきたいですし、私たち福島大学もできるところで応援していきたいなと思っています。

——富岡町の保全資料は、福島大の協力を受け、活用に向けてすでに六回ほど資料整理を行い、先ほどお話があった通り一万二、〇〇〇点以上の目録化を終えました。地域の大学と町が連携していることの意義や期待する効果を、副町長と阿部先生それぞれの立場・視点から。

齊藤

福島大学は国立大学法人、昔の国立大学です。地方にある大学として、地域の活性化というか地域の魅力を増すような大学の機関であってほしい。そこに存在意義があると私は思っています。実は福島大は私の母校です。アカデミックな部分がしっかり機能することは、大学としてあたり前といえばあたり前ですが、一方、行政とどうリンクするか。そういった意味では、今までよりもどんどん充実してきていると思います。私が卒業して二十数年経ちますが、客観的に当時と今を比べれば、より地域に目を向けている姿勢を感じています。実は、今回の一つ事例をとっても、学生さんが資料整理を行ってくださっていますが、あれはボランティアですか。

阿部

資料整理は授業の一環ですが、今おっしゃられたように、学外の一般市民の方もボランティアとして希望して参加してくださっています。

齊藤

有志というか希望者というか、そういった方々と地域がまさに繋がる。そしてやっぱり素人だけではダメなんですよね。先生がいて、指導のもとで適切に保存するという意味では、基礎的な部分はやはり大学という専門教育を受けた方々と協力してやることに非常に意味があります。町職員だけではなかなかやりきれない。

先ほど先生もおっしゃったことで、残念な震災ではありますが、それをきっかけに地域の大学と行政がつながり、相乗効果をどんどん発揮していくことが、未来の県民なり、孫子の代に向けて我々がやるべき「使命」の一つだと思います。

効果という意味では、まさに若い学生さんとのつながりができ、若い方が地域にどんどん興味を抱くようなきっかけとなる。福島大学は、別に福島県民だけでなく全国から来ていますから、遠い地域の、自分の育った文化とこの福島の違いなどをきっかけに、日本の文化を知る。それを将来大人になって、社会人になってどう活かすかという意味では非常に貴重な経験を学生さんもされているので、役場としても意味を感じています。二年前の役場は、今同様に次から次へと仕事が増え込んでいました。震災前の予算規模で、七十億、八十億だった富岡町が、今二百億を超えています。間違いなくそれだけ仕事が多い中で、ただやるべきことはやらなければならないし、その当時、「今やらないとダメだ」という職員の思いを私も感じました。これは、片手間ではないんです。自分の仕事を持ちながら、プロジェクトチームを立ち上げてやっていることは、役場の組織的にも実は非常に意味があることです。町民の皆さんに、どう理解して、どう訴えていくかということで、非常に。

これも一つだけお話ししますが、今回の歴史PTの二年間の活動も、新聞の掲載率はかなり高い。富岡って、毎日ではないんですがかなり地元紙にはいろんな復旧・復興の様子を掲載していただいています。そして特に際立ってこの歴史PTの情報発信をもらっています。企画展もそうですし、3Dアーカイブの展開も考えていますので、もっともっと町民の皆さんに、この意義を、まず事実を知ってもらおう。こういう活動の事実。あとは共感していただければ、もっと発展させることができると思っています。

阿部

副町長さんは本学の卒業生ということで、よくご存知だと思いますが、行政政策学類は、前身の行政社会学部の発足当初から地域貢献を柱に、歴代の教員がそれぞれの専門性も活かしながらさまざまな活動が続けてきました。私たち歴史系は博物館学芸員資格を通じて地域に人材を送り出す面では確かに貢献はしてきたのですが、他の専門の先生方のように、地域に入っていく、町の皆さんと一緒に活動していくことは今までではなかなかできにくかったと思います。今回のような歴史資料保全活動を通じて、実際に町役場の職員や地元の皆さんと一緒に活動し、直接交流できるところが、学生にとって非常に大きいと思います。

彼らがよく言うのは、「今までは何となく歴史が好きで、勉強しようと思って入ってきた」とか、「何となく将来、地元の役に立ちたいから公務員になろうと思っている」と。そういう「何となく」だったことが、この歴史資料保全活動を通じて、自分たちが今やっている学問研究とはこういうかたちで地元のために役に立つことがあるんだと実感していく、そういう良い効果があったと思うんですね。彼らにとっては日々、例えば富岡町さんの資料に触れて整理をしていくと、例えば富岡出身者でなくても、富岡町に対する思いというか、親しみというか、そういう感情が自然と生まれてきていると思うんですね。

このようにして、漠然としていた地域貢献と専門で学んでいる歴史学のつながりがだんだん見えてきて、「自分が地域のために役立つということはこういうことなんだ」と彼らなりに理解していく。そして、県内出身者もそうですけども、県外出身者であっても福島という地に愛着を持つようになって、中には福島で職を得よう

と定着していく子たちも少しずつ出ています。さらに、卒業研究で富岡町を研究の素材にしてみようという学生たちが出てくれば、また違った富岡町と福島大学との関係ができてくるんじゃないかなと、そのような期待も持っています。

齊藤

学生さんが学術研究を大学でやることについて、今聞いていて思ったんですが、やはり現場が大切なんですね。人々の生活は現場で起きてきました。あと、被災地の実態というのはやっぱり現場を知らないといけない。大学で、俯瞰して全体を見られる知識を蓄えて、現場にも行って皆さんと接して色々なことを感じる。このバランスが必要かなと。あとは、活動を通じて社会の一部であったり、役場職員を始め社会人の先輩との会話というのは非常に学生さんにとってもいいんじゃないのかなと。やっぱり現場に出て感覚を研ぎ澄ました方が、研究でも活きると思います。

阿部

もちろん、大学できちんと座学で勉強するのが前提ですが、机の上で本に向かっているだけでは分からないことがどうしても出てきます。そこは豊かな感性を持っているうちに、いろんな場所に積極的に出ていってほしい。富岡町さんと本格的に交流が始まったのは二〇一二年、富岡町歴史民俗資料館の収蔵資料を旧相馬女子高校の一時保管場所に運んだ時でした。実際に地元の職員の皆さん、博物館の関係者の皆さんなど、いろんな

方たちと一緒に汗流しながら物を運ぶ中で、富岡町の皆さんがこれまで大事に営んできた文化・歴史のまさに証人となる文化財を「今自分がこうやって大事に一つずつ運んでいるんだ」ということを実感できたはずです。自分たちがやっていることの意義を、自ら感じとっていったと思うんですね。彼らの進路選択、これからどんなふうに社会へ出て、どういう職に就きたいかを考えるときに、明確な目的意識を培ってくれる効果は相当あったと思います。

——学芸員以外の職員は、古文書に触った経験がなかったが、学生と一緒に二年間作業することで、ノウハウや資料の扱い方を学んだ。これは、今後役場が町民に水平展開できる実証的な意味を持つており、やる気や学ぶ姿勢があれば、一般の方々でも一緒に資料整理や保全ができる可能性があると思う。町民に対していかに水平展開できるかの可能性について副町長から。そして、そういった試みをいかに広げていくべきか、そのアイデア、打開策があれば、阿部先生から。

齊藤

町民への水平展開についてですが、よく一言で言われる「震災からの復旧・復興」とは、それが何を意味するかをまず考えないといけないと思います。私どもは、「ふるさと富岡の復興」と「心の復興」が両輪だと言っています。なぜならば、今、フィールドとしての富岡町、被災地としての富岡町を、しっかり我々の世代で次につなげるべく復興の種を植えて芽を出させるのは間違いない必要なんです。それが今どんどん進んできてい

ます。まず、これ自体は否定されるべきことではない。

ただ一方で、富岡町の現状としては、平成二十九年春に町民の帰還開始を目指していますが、帰るという判断をしたくてもできないという方が相当数いると私は感じてます。ふるさと富岡の復興というのは、昔の富岡を取り戻す。インフラも含めた復旧・復興の拠点にするということです。対して、心の復興の政策をいかに積み重ねるかというのが、我々の大きなミッションです。正直今の段階では、ふるさと富岡の復興の方が目立っています。そうすると、何か帰還を迫られる違和感を感じている方が間違いないと思います。平成二十七年六月に作った第二次復興計画計画には、どんな選択をしても富岡とつながっている。あるいは富岡に誇りを持つて生きている。そういった社会とか空間にしないと、何か帰還一辺倒と感じさせてしまう。復興といいながら、インフラ復旧だけでは、違和感がずつと残る。

阿部

何かこう、息苦しさを感じてしまうという…。

齊藤

そうなんです。あと、避難先で、ちょっと居づらくなるようなこともあるんですね、おそらく。心の復興とどうかどうかは別にして、避難先でも、あるいは長期的にまだ避難を続けざるを得ない方とどうつながるか。前置きが長くなりましたが、まずその政策の一つの大きな柱になり得るのが、歴史P.Tのすべての活動です。

水平展開とありましたが、だんだん富岡で復旧が進み、復興が進み、少しずつ戻る方が増えるステージになると思いますが、そのときに、例えば、たまに富岡に戻って、「歴史P.Tの収集活動をみんなで行ってみない？」と言いたい。若い人だつていいし、おじいちゃんもおばあちゃんもいい。知識のある学生さんもいますし、役場のP.Tの職員も知識を持っていたり、ノウハウや段取りとかもできてきている。例えばそういった事業を政策化して何かのきっかけ作りをしたいという意味で、この救出活動が活きていきます。あとは、よく学芸員が言ってるんですが、歴史的なすごいお宝だけじゃなくていいんです。営みカレンダーだったり、地域のポスターだったり、何とか記念のお皿があった、それでもいい。資料は実は身近に身の回りにあって、残すことの意義を感じてもらえれば、活動に参加しやすい環境になるかなと思います。整理活動などで、富岡と避難先がつながっていることが非常に重要です。将来的に、次の子どもの代でもいいですが、もっと長いスパンを考えなければなりません。すぐに数字では出てこないかもしれませんが、間違いなく歴史的に価値のある事業になると私は確信しております。

阿部

実際に体験していただいて、町民の皆さんが「専門家でないけどめなんだ」と何となく感じている敷居の高さを下げていくのが一番いいことだと思っくんですね。現場では、ある程度手順として専門的にやらなければいけない部分と、やる気があれば誰でもできる部分とがあります。どういうかたちで整理していくかという方針や段取りなどについては、ある程度経験や知識があった人間がやったほうがいいと思います。でも、それ以降

の実際の作業は、どなたであつてもいいわけです。地元の方であれば、自分たちが無意識のうちに慣れ親しんでいた地域の歴史が、今こういう形で残っているんだということを、実際に手に触れて、物で持つてみるというのは感覚的にすごくよく伝わると思うんですね。一番良いのは、一人でも多くの町民の皆さんに、プロジェクトチームがやっている活動に関わっていただけることだと思うんですね。ただ、富岡町に限らずどこもそうなんです、それは非常に難しいと感じています。うちの大学では定期的に資料整理をやつていまして、一般のボランティアの皆さんにもお声掛けはしているんです。作業のおもしろさとか、意外と難しいものではないんだとわかつてくださった方は定期的に来てくださるようになるんですが、なかなかその第一歩を踏み出すのが難しい。今、富岡町さんの資料整理を福島大学が支援させていただいてますけれども、市民ボランティアに関しては私が代表を務めているふくしま史料ネットで参加を呼びかけています。これまで何人か、ボランティアで来てくださった方もいますが、普段からこの活動に取り組んでおられる経験者の方が多く、初めての方はまだ参加されていません。

平日の開催がネックなのかもしれませんので、普段お仕事されている方でも参加できそうな土曜日などに作業日を設定してみるなど、参加しやすい工夫が必要だと思っています。

——住民と一番身近にいる市町村行政と大学が連携するというなかで、敷居を下げる、あるいは、実際の活動をどう伝えるか。発信・皆さんへの伝え方は工夫が必要と思うが。

齊藤

楽しいと感じてもらえる活動がしたいですね。「PTと一緒にやるのが楽しみ」みたいな、そういったきっかけにもなるような。おじいちゃんおばあちゃんも「ちょっと混ざってみつかないかな」みたいな、そんなノリの。

阿部

おじいちゃん・おばあちゃんは地元のことをよくご存じで、いろいろお話をしてくださいます。そういうのを学生たちにも話してもらうとか。学生たちは割と素直に楽しんで聞きますから、おじいちゃん・おばあちゃんも、聞いてくれる人がいるんだったら富岡のいろんな知つてることを今のうちにいっぱい喋っておこうみたいに思われるかもしれないし、そこはいい効果かなと思うんですね。

齊藤

何かそういった事業を一つやってみて、あまり重くしないで時間も凝縮しながら、気軽なものを展開するの
がいい。

阿部

震災直後から危惧されていましたが、地元の方が詳しくご存じだった地名とかもそうです。あの辺は地元では通称何て呼んでいたとか。それは地図などには残りにくいところがあつて、地元の皆さんがこれまで培つてき

た生活の中の記憶であり、歴史や文化にとって非常に重みがあるものなのだけれども、次の世代に伝えるのはなかなか難しい。富岡町さんは、何とか地域の歴史や文化を残して次につなげなければということでご死な思いでやっていて、意識が高まっているところだと思います。一見、歴史とか文化とは関係ないかもしれないけれど、地元のことについて詳しい方とか、地元のことを非常に好きでいろいろ調べておられる方たちが記憶として持っている情報を、まさに世間話をしながら、お茶でも飲みながら楽しく聞かせていただいて、少しでも何かかたちとして残せるようにお手伝いをするというあたりが多分、これから大学のような研究機関にも求められる役割ではないかと思います。

——最後に、町としての今後の事業構想を副町長から。また大学側として、今後どういったことができそうかという助言、あるいは協定の中でどのように一緒に歩んでいくかという点について阿部先生から。

齊藤

行政が進めるということは、財源の確保を含めて、町民の皆さんの理解が必要だと思っています。水平展開という話がありましたが、今までの救出活動と企画展とあと3Dデジタルアーカイブですね、富岡の風景を撮って、被災の状況も含めて、そういった具体の事業を少しずついいから高めていきたいなと思います。

歴史PTは、ゼロ予算という言い方を我々するんですが、予算が何もない中で始まりました。要は職員の時間と労力でやってきた事業なんです、平成二十八年度は当初予算にもしつかり事業として上げてますし、今

後、まさに町民の皆さんと一緒にしながら、このプロジェクトを発展させていきたい。あとは歴史・文化の保存とか、そういったことを軸とした様々な「復興」ですね。未来に向けての復興。あと、子供たち、将来世代に対してつなげていく。そういった意味合いもありますので、事業の意義を共有しながら水平展開をしていきたいと思っています。

あともう一つは、アーカイブという観点があると思うんです。震災遺産の関係です。今ほとんど復興が進んでいますので、しっかり後世に伝えていきたいと思っています。今、県でも、アーカイブの施設等の検討が始まっていますが、県の動きと連動しながら富岡町としてもどう発信していくか。これは未曾有の災害です。これだけの災害というのは、人類が経験したことないような災害ですので、その教訓などを後世にしっかりとつなげていきたいと思っています。

もう一つだけ欲を言えば、アーカイブ関係で二名の警察官が殉職されました。それで、津波に流されて破壊されたパトカーを環境省が処分するとなった際に、町民の皆さん、有志の皆さんが声を上げたんですね。町民の皆さんが、「自分たちを救ってくれたお二人の警官の方を忘れてはいけない。このパトカーを残すべきだ」と要望書が上がってきました。まさに町民が声を上げて、町が政策として動いたものです。ご遺族の方という調整し、ご理解をいただきながら、双葉警察署の隣にパトカーを保存すると。その過程には、今言った町民の皆さんの要望があった。錆び止めとか、洗浄、移送とか町民の方がボランティアでやっていた。このように町民の考えを具現化するのが、私は役場だと思っています。「なかなかやるね、役場」と思われたいですし、町民と役場がしっかりと一緒になって、そして、福島大学さんを始め、あらゆる皆さんとも連携して、この事業、

あるいは富岡の復興をもっともつと発展させたいと思っています。よろしく願います。

阿部

私たち大学は今後とも富岡町さんの支援を続けられるように努力していきます。協定から一年ということで、今年の秋には学内での展示なども考えております。そうした展示等を通した広報での支援もできます。そして何より、大学の役割は研究と教育ですので、研究面では富岡町のこれまで集めてきたさまざまな資料を活用したい。展示というのは、ある意味では比較的やりやすいものですが、資料を活用した研究となると難しいところがありますので、少しずつでも大学として成果を出せるように協力していきたいと思っています。もちろん教育としては、学生たちを地域に貢献できる人材として育成していくのが我々の使命でもありますので、富岡町さんだけではなく、今回の大きな被災によって苦しんでいる地域のために役立てるような学生たちを一人でも多く出していくことで、これからも変わらず努力をしていきたいなと思っています。

ふくしま史料ネットとしては、今やっているような富岡町と福島大学、そこに一般の市民の皆さんが関わってといくやり方を一つのモデルとして確立し、さらに周辺の地域へと広げたい。すでに同じような動きをして資料整理をやっている町もあれば、なかなかそこまで手が届いていないという自治体もあります。自治体によって地域資料の保全と継承の進捗度に差があつてはならないわけで、地域資料にしても震災遺産にしても、どこでも同じように保全をして将来につなげていくことが必要です。そういう意味では今、富岡町さんの場合は一番先頭を行っているわけですが、そういったモデルをできるだけ他の地域にも広げていって、福島県全体とし

て「あの震災があつたけれども、その経験をプラスに変えて、私たちは地域の歴史や文化、震災の記憶といった、後世の人たちが検証するための材料をこれだけ残すことができたんだ」というように、各地域で同じように成果がまとめられるためのお手伝いができればなと思っています。

あとがき

本書は、二〇一六年十月二十二日に福島大学附属図書館を会場として開催された、シンポジウム「なぜ地域資料を保全するのか」の成果を中心にとめられたものである。福島県富岡町と福島大学は、二〇一五年八月二十七日に「歴史・文化等保全活動に関する協定」を締結した。その締結一周年を記念し、同じく福島大学附属図書館を会場として、企画展「ふるさとを想う まもる つなぐ」地域と町役場の試み」が、二〇一六年十月二十二日から同月三十日まで開かれたが、同シンポジウムはこの企画展の一環として開催されたものである。当日は、福島大学内という場所柄、特に福島大学の学生の参加が多く見られ、パネルディスカッションでは、本書に掲載された討論記録にある通り、学生たちからも積極的な発言があり、議論が活発に行われた。盛会となったシンポジウムの終了後、この成果をどうにか形にして残すことはできないかとの意見が出され、富岡町役場の三瓶秀文さん、門馬健さんをはじめ、富岡町役場の皆さんのご尽力により、こうして一書として刊行する運びとなった。

富岡町と福島大学は、前述の通り、二〇一五年八月に協定を締結し、富岡町域の地域資料の継承に必要な活動について相互に協力することを取り極めた。しかし富岡町と福

島大学との協力関係は、この協定によって始まった訳ではない。本書掲載の徳竹基調講演・三瓶報告などで経緯が説明されている通り、この協力関係は、富岡町で二〇一四年に「富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム」が発足した当初に、富岡町の門馬健さんから、福島大学の徳竹剛先生へ、プロジェクトへの協力の依頼があったことに始まる。すなわち、地域資料の継承に強い熱意をもった一個人と、それに呼応した一個人という、両組織に属する個人同士の関係から始まったのであり、そこに様々な人たちの協力の輪が重なり合ったことで、一年後には組織同士の協定にまで発展した訳である。

私自身がこの活動に参加するようになったのは、二〇一五年四月に福島大学に赴任して以降であるが、これまでの活動の軌跡を聞くなかで、こうした富岡町と福島大学との協力関係は、他の自治体や組織にとっても一つのモデルケースとなるのではないかと考えるようになった。組織に属する一個人がその組織を動かすことは、そう容易ではない。しかし、個人同士がまず協力し合い、協力の輪を広げ、自主的な活動を地道に続けていくことで、組織同士の公的な協力関係にまで発展させることができる。いわば草の根の活動が、人を動かし、組織を動かすことができること、その確かな可能性を我々に示してくれているように思う。

自治体と大学とは、互いに必要なものを補い合える存在である。大学には、専門知識や技術をもった教員と、ある程度の知識・技術と旺盛な好奇心をもった多くの学生がいる。知識・技術と人手という自治体に不足しがちな部分を、大学は豊富に持っている。

一方大学も、専門知識・技術の社会への還元方法の模索が求められており、また学生に様々な社会経験を積ませ、物事を多角的に考えさせることが求められている。もちろんこうした活動への学生の協力には限界もある。危険を伴う作業に従事させる訳にはいかないし、たとえ交通費であっても自弁を求めるのはなかなか心苦しい。しかしそれでもなお、本書で繰り返し述べられている通り、自治体と大学とが協力し合うことには大きなメリットがある。こうした協力関係が、今後富岡町だけに留まらず、同様の問題を抱えた多くの自治体にも広がっていくことを、そして、本書がそのきっかけとなってくれることを、切に望みたい。

シンポジウムでは今後の課題として、本活動の成果を実際の復興・再生へどう繋げていくか、ということがたびたび取り上げられた。地域資料の保全活動をそこへと繋げていくためには、次の段階として、資料の分析・研究が不可欠であり、そこから地域像を描き出し、文章など何らかの形で地域の人たちに届けていくという作業が必要となる。そしてその作業においても、自治体と大学との協力関係は有効にはたらくはずである。富岡町と福島大学の協力関係に基づく活動が、今後も継続的に行われ、数年後には、より直接的に復興・再生に繋がるような、次の段階の新たなモデルケースが提示できることを期待し、また私自身もそれを目指して活動に協力していこうと思う。

最後に、本書刊行のためにご尽力いただいた皆さまに深く感謝申し上げます。また、本書のもととなったシンポジウムにご参加いただいた皆さま、シンポジウム運営をお手

伝いただいた皆さま、そしてこれまで本活動に協力してくださった全ての皆さまにも感謝申し上げますとともに、今後とも変わらず本活動へご協力いただきますよう、お願い申し上げます。

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター員

人間発達文化学類准教授(日本近世史) 小松 賢司

このたびの企画展・シンポジウム・本書の作成に当たり、一般財団法人 福島民報教育福祉事業団様より助成をいただきました。ここに明記いたしますとともに、関係諸団体・個人のご協力に心より感謝申し上げます。

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター

地域復興支援部門長

行政政策学類教授(考古学) 菊地 芳朗

執筆者

- ・ 齊藤 紀明（富岡町副町長・富岡町歴史文化等保存プロジェクトチーム主任）
- ・ 阿部 浩一（福島大学行政政策学類教授・富岡町文化財保護審議会会長）
- ・ 徳竹 剛（福島大学行政政策学類准教授）
- ・ 小松 賢司（福島大学人間発達文化学類准教授）
- ・ 柳沼 賢治（福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任准教授）
- ・ 大原 弘道（富岡町民資料寄託者・中央商店街）
- ・ 菅家美和子（歴史資料保全活動参加ボランティア）
- ・ 吉岡 崇（埼玉県杉戸町役場・他自治体復興支援職員・
元富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチームメンバー）
- ・ 佐藤 新（福島大学行政政策学類4年生）
- ・ 三瓶 秀文（富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム・富岡町教育委員会主任学芸員）
- ・ 門馬 健（富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム学芸員）

ふるさとを 想う まもる つなぐ ～地域の大学と町役場の試み～

2017年3月 発行

編集・発行 富岡町 福島県双葉郡富岡町大字本岡字王塚622番1
福島大学
福島大学うつくしまふくしま未来支援センター
福島県福島市金谷川1番地

印刷所 株式会社 日進堂印刷所
〒960-2194 福島県福島市庄野字柿場1番1号
